
魔法少女リリカルなのは～紅蓮の王～

優しい水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは紅蓮の王

【Nコード】

N1942L

【作者名】

優しい水

【あらすじ】

神々との戦いに勝利した紅蓮の王は眠りにつくはずだった。しかし、観測者の手により別の世界に飛ばされる。その世界で神々が眠りにつき、力を蓄えていることを知った紅蓮の王。だが、彼にはあまり命が残されていなかった。彼はその世界で出会った技術を使い己の力を残した。

次代の紅蓮の王のために。

これはそんな力に選ばれてしまった一人の少年の物語。

魔法少女リリカルなのは紅蓮の王が始まります。

プロローグ〜全ての始まり〜（前書き）

初投稿です！

駄文ですが、楽しんでもらえるような作品にしていくつもりです。

プロローグ 全ての始まり

それはどこかの部屋だった。

ただあるのはテーブルと椅子、そして椅子の後ろに置かれた大きな鏡だった。

そんな部屋にいるのは少女ただ一人。

椅子に座り、テーブルに広げられたものをみている。

そこには二枚のカードと大小様々な石があった。

色は二色。

炎のように真っ赤なカードと赤の石。

海のように真っ青のカードと青の石。

そして突然、青のカードが燃え始め、青の石が砕けていく。

テーブルに残るのは赤のカードと赤の石のみ。

「ふむ、終わりましたか。そちらはどうですか？」

テーブルを見つめていた少女が声を発する。

すると鏡が脈打ち、椅子に座り、こちらに背を向けテーブルを見

つめている少年を映す。

「まだ終わっていませんよ。どちらが勝ちましたか？」

子供にしては感情のない声で問いかける。

二人は背を向けたまま会話を続ける。

「紅蓮の王ですよ」

「戦いは終わりというわけですか」

少女は首を横に振り、その言葉を否定した。

「まだ……ですよ。新たな戦場がもう用意されています」

しばしの沈黙の後、先に声を発したのは少年だった。

「……神々はあきらめませんでしたか」

「ええ。王がいる世界では防がれてしまう。ならば、王のいない所

で、自分たちの思い通りにできる世界を作り出そうとしています」

「その世界に人は？」

「いますよ、困ったものですよね。神には神の。人には人の世があるというのに」

「だから私たち観測者がいるのでしょうか？」

少年は肩をすくめる。

少女は赤のカードを触りながら、

「しかし、神々も消耗したようです。一度眠りにつき、力を取り戻すつもりの方ですかね」

「王を送るのですか？」

「そうしなければならいでしょう。王でなければ彼らには勝てないのですから」

「ですが、その王は……」

少年の言葉に少女は答える。

「ええ、もう戦うことはできません。…送った先の世界で何らかの形で力を残してもらはねばなりません」

「それは、次代の王を作ることですか？」

「そうなります」

少女は椅子から立ち上がり、テーブルから赤のカードだけを取り上げた。

少年の方を向かず問う。

「私は次代が目覚めるまで眠りにつきます。そちらはどのように？」
少年も少女の方を向かず、ため息とともに答える。

「このままいくと黒淵になると思います。ですので、やり直しになるかもしれません」

「そうですね。……幸運を祈ります」

そう言うと、少女は部屋から姿を消した。

「幸運……ですか。彼女たちや次に選ばれる王にとっては戦いがないのが幸運なのでしょうが……」

鏡に映る少年の表情は、少女には聞こえることなく、誰もいない部屋にむなしく響いた。

プロローグ〈全ての始まり〉（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

次の更新はいつになるかわかりませんが、見捨てないでくれるとうれしいです。

第一話 ～夢ぞして目覚め～（前書き）

はい、二話目です。いきなり文章が長くなってしまっごめんなさい！

書いてたらいつのまにか長くなってました。

読む量としてはすくないのかな？

楽しんでいただければ幸いです。

では、どぞ！

第一話　く夢そして目覚め

夢を見る。

いつからか見るようになった夢。

ありとあらゆる神魔霊獣を統べ、世界を手にしようとした神々と戦った、一人の王の物語。

物語はノイズ混じりで所々消えたりもした。

物語は突然終わり世界が回る。

ああ、またか、と思う。

この夢を見るようになって、何度も何度も起こったこと。漆黒の空間に王と自分だけが立っている。

王が何かを呟く。

『お……が……。ぎの……。い。紅蓮……』

「何だ！？何が言いたいんだ!？」

夢だと思っているはずなのに、疑問の声を上げる。

『か……が……。い……』

王の姿が消えていく。

夢の中の自分は動くことができず、声だけしかだせなかった。

「おい！待てよ！！俺に何をさせたいんだ!？」

どれだけ声を振り絞っても、王は消えていき、声も聞こえなくなっていた。

「お……日神・？・帝君!！」わあ!？」

名前を呼ばれ飛び起きる。

目の前には、笑顔で立っている教師という名の鬼がいた。

クラスの皆はこちらを見ており、苦笑している者、呆れている者、笑いを必死に押し殺している者がいた。

こいつら、人事だと思いやがって……。

内心で毒づくがそれどころではない。

「日神君……？先生の授業、そんなにつまらなかったかな？」

笑顔のはずなのに、ものすごいプレッシャーを放っていて冷や汗が頬をつたっていく。

「あー、えと、その」

何を言っても破滅しか待っていない気がする…。

「うん、何かな」

これは、腹を決めねばならない。だから、

「ごめんなさい！！いつのまにか寝てました！！」

言った。

「ふーん、そつか。じゃ、日神君は今日の宿題5倍ね」

「えっ！」

死刑宣告が下される。

「ちなみに、締め切りは明日ね」

「うそお！？」

「あー、くそ、ひどい目にあった」

机に突っ伏しぼやく。

今は休み時間なので、教室の中は騒がしかった。

「帝、アンタの自業自得じゃない」

長い金髪の少女が帝に話しかける。

帝は自分のひと房だけ細く伸ばして、うなじのところを紐でまとめた白髪をいじりながら身を起こす。

「うるせーよ。で、なんのようだ？」

ふてくされた声でアリサ。アリサ・バニングスに問う。

「みーくんと一緒にお昼食べようと思って」

答えたのは茶色の髪をツインテールにした少女。

にこにこ何が嬉しいのか、満面の笑顔だった。

「……なのは頼むからみーくんはやめてくれ。ねこじゃないんだから」

なのは。高町なのはに言いながら、帝はまた机に突っ伏す。

アリサの隣でなのはがブーブー文句を言っているが、聞こえない。というか聞きたくない。

一体いつから彼女は自分のことをあんな風に呼ぶようになったのか？記憶を探るが、思い出せない。

それだけ彼女との付き合いは長いのだな、と思う。

「クスクス、ほら、帝君機嫌なおして？早くご飯たべないとお昼休みなくなっちゃうよ？」

笑いながら話しかけてきたのは、長い髪をカチューシャで止めた少女、すずか。月村すずかだった。

「そうだな、飯食うか！」

帝は元気よく椅子から立ち上がり、昼食の準備を始めた。

「で、何でアンタ寝てたのよ？」

アリサは弁当箱の中に入っていたハンバーグを口に入れ、咀嚼した後、箸を帝に向けながら聞いてきた。

「いつの間にか寝てたんだよ。つか、行儀悪いだろ。箸をこっちに向けんな。それでもお嬢様か？」

右斜め前に座るアリサに注意したら、「なによー!？」と叫びだした。すずかが、どうどうとなだめにかかる。

笑いながらその光景を眺める。

だが、帝は違うことを考えていた。

夢の映像。

血が舞う戦場。

そこにいた者たちは相手を倒すために、己の武器をふるう。味方も敵も倒れていく。

しかし、死ぬことはない。

王や神と契約した者たちは、王や神が死ぬまで死ぬことが許され

ない。

ゆえに、傷ついても死ぬことはなく、傷が癒えればまた戦いに参加する。

王か神。どちらかが死ぬまで契約した者の戦いは続く。

地獄絵図。

あれはきつとそういうものなのだろう。

最初あの映像を見たときは吐いた。

首を飛ばされたものが、

胸を切り裂かれたものが、

腹を抉られたものが、

体を潰されたものが、

そのほか傷ついたものが、光に包まれると傷を負っていない体になり、また戦う。

無限に続く戦い。

終わり方は王か神のどちらかが死ぬこと。

王は勝ち続け、王の軍勢は欠けることはなかった。

王は一度も振り返ることはなく、背中を仲間に残け、戦場には一番最初に向かっていった。

そんな背を見て思う。

俺も……いつか……。

「みーくん？」

なのはの声で我に返る。

俺は今何を考えていた？

「どうしたの？気分、悪いの？」

心配そうな声で帝に声をかける。

「え？帝君、体調悪いの？」

「アンタ大丈夫なんでしょうね！？」

さつきまで騒いでいたはずかとアリサも聞いてくる。

だから、笑う。これ以上心配させないように。

「大丈夫だよ。ちょっと考え事してただけだから」

三人は心配そうな顔をしたままだ。
考えていたことを知られるわけにはいかない。
だから、その後は適当なことを言っごまかした。

何とか頑張つて三人を納得させ、昼休みを終え、授業になった。
またそのときも寝てしまい、あの夢をまた見た。

放課後

「アンタほんとに大丈夫？」

「顔色わるいよ？」

「みーくん……」

三人ともまた心配そうな顔をする。

「大丈夫だつて、とつとと帰つて寝るからよ。ほら、お前ら今日塾
だろ？早く行けよ」

軽い調子で話し、彼女たちが何かを言う前にその場を離れた。

一人道を歩きながら思う。

ここまでひどいことはなかった、と。

授業中に眠ったこともなければ、昼間にあの夢を見たこともない。
夜、寝て見る夢は曖昧だった。

しかし、昼休み後に見た夢は今までで一番鮮明だった。

戦場の空気が感じられたし、血のおいもした。

そんなことを考えていたからだろ。

回りから音と色が消え、白と黒だけの世界に変わっていることに、
帝は気付かなかつた。

「あ、あれ？」

もうすぐ家だと思い、顔を上げると周りの景色が違った。

「どういうことだ？」

疑問の声をあげるが、誰もいない世界では答える者はいない。

そして、突然の爆音。帝の身を、熱をはらんだ突風が襲う。

「うわっ！な、なんだ!？」

吹き飛ばされ、体を打ち、所々擦りむいたりした。だが、痛みを無視し、音のした方向に顔を向ける。

そこにいたのは赤の魔人。

上半身は裸で、肌は赤く筋肉の鎧に包まれ、

左右のこめかみから白く長い角が生えていた。

赤の長い髪をたなびかせ、炎をまとう。

その炎はあまりにも高温なのだろう。

道路や壁、家などが溶けていった。

「この世界か、奴らが求めているのは……」

魔人は唸り声にも似た声をあげる。

「……あ」

あれはヤバい！見つかつちゃだめだ！逃げなければ殺される！！人間の生存本能が盛大に警鐘を鳴らす、恐怖で身がすくみ、体は震えるだけだった。

「む？」

魔人は帝に気づき、体を向ける。

「見られてしまったか。いたしかたない。己が不運を呪うがいい小僧……!」

手のひらに炎を集中させる。

「俺は死ぬのか？」

「何、痛みを感じることはない。全ては一瞬で終わる。さらば！灰と消えよ……!」

道を破壊しながら、炎が迫る。

「こんなあつけなく殺されるのか？こんな終わり方でいいのか！？」

どれだけ思っても恐怖は帝の体を縛り、死を近づける。

「俺はまだ…生きたい！！！」

《——状況、危険と判断》

いきなり頭の中に声が響いた。

炎は目前に迫っている。

《緊急プログラムを起動。検索……該当。

ロード麒麟。アビリティ、絶対障壁を発動します》

帝を爆発が襲う。

第一話　く夢そして目覚めく（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

バイト先からいきなり電話がかかってきて驚いた作者です。

まあ、電話には出なかつたんですけどね《笑》

自動車学校で車に乗ってましたから。

明日は投稿するかわかりませんが、なるべく早く投稿するつもりです。

読んでくれている人いるかわかりませんが、待っていてくれると嬉しいです。

第二話 〱契約〱 (前書き)

はい、第二話です。今回の話で使い魔がでます。
なぜ彼らを選んだかは、作者の趣味です。
では、楽しんでもらえたら嬉しいです。

第二話 契約

「俺は…生きてるのか…？」

あたりは炎に包まれ、瓦礫の山が出来ていた。

《…残り魔力、40%。絶対障壁維持、可能》

また、頭に声が響く。

「なんだ！？何なんだよこれは！？」

手で頭を押さえ、周りを見回すが煙で何も見えない。

《攻撃手段、検索。該当。しかし、残り魔力では使用不可。

《迅速な魔力供給を求めます》

煙が晴れていき、帝の目の前には一冊の本が浮かんでいた。

「なんで、本が…？」

《…生きたいか？》

今まで聞こえていた声とは違う声が聞こえる。

低い男の声。

「だれだ！？」

あたりを見回すが、人影は見られない。

《ここだ、少年》

呼ばれた方に目を向けると、黒い宝石が宙に浮いていた。

「うわっ！？」

それも、目の前に。

《む、そこまで驚くことはないだろう。まあ、私も近すぎたとは思
うが…。》

申し遅れたが、私の名はドュクス。少年、君の名は？》

黒い宝石…ドュクスは点滅しながら、帝に問いかける。

「…帝…、日神…？・帝だ」

《ふむ…、王の意味をもつ名か…。いい《ドュクス、早くしてください。このままでは、我々は皆死ぬことになります》む、すまん》

ドルクスの言葉の途中で別の、頭の中に響いていた声が聞こえる。それは、宙に浮いていた本から聞こえていた。

本は赤の表紙に剣の装飾がされ、剣の中央に赤の宝石が象眼されていた。

《帝…、生きたいのなら我々と契約しなさい。それが、あなたがここから生きて帰る唯一の手段です》

本は帝に迫る。

《生きたいのなら、私に触れなさい》

「…そんな暇を与えるとても？」

赤の魔人はいつのまにか帝たちの近くにいた。

《っ！？炎の魔人イフリート、また貴様に出会うことになるとはな…》

ドルクスの声はどこか懐かしそうだった。

「その声は奴と共にいた機械人形か。よもや、そのような姿になっていようとは」

《ふん、私は彼の教育係であり、保護者だ。彼の後を継ぐであろう者を育てるのは私以外にはいまい》

「…ここに来た目的は偵察だったのだが、王が生まれようとしているのなら、ここでその命奪わせてもらうぞ！小僧！！」

イフリートが吠えた瞬間、炎が噴きあがり、周りの温度が一気に上がる。そして、炎をまとった腕を振り上げ、帝にその剛腕を叩きつけようとする。

噴出した汗は一瞬で渴き、肌を干上がらせる。

迫る死の感覚。

普通の小学生ならば、一生感じることはないであろう、誰かに殺意を向けられるということ。

しかも、自分を殺そうとしている相手は人間ではなく、化け物である。

なんとという理不尽か！

このようなことが宿命として決まっていたのか！

どこかの部屋で少女は無職のカードを触る。

《選ばれ、決められたことは誰にも変えられません。ならば、それに抗うしかない。抗うことを求めるならば、抗う力を求めるならば、それに触れるなさい。ですが、戦いの運命を背負うことになるでしょう。》

抗う力、それ自体が宿命であり、なにかの役目を持っています。

さあ、道は示しました。日神・？・帝。あなたはどちらを選びますか？

死を選ぶというのなら、私たちも諦めましょう。

生を望むなら、戦いへの覚悟を《

死の爪が目前に迫る。

当たれば、人間など紙のように引き裂くだろう。

だから、選ぶ。

死にたくない、と。

まだ生きていたい、と。

脳裏に思い出されるのは、日常。

家族がいて、友人たちがいるあたりまえな世界。

生きるために、

自分は、

力を、

手にする。

光が爆発した。

無色のカードは赤色に染まっていった。

「やはり、こうなりましたか」

少女はカードを大切そうになでる。

「さあ、始めましょう。新しい《ロード・オブ・ヴァーミリオン》
紅蓮の王の物語を！」

体から何かが大量に流れていく感覚。

力が抜け、帝は体を支えることができなかった。

だが、倒れることはなく、何か大きいものに背を支えられている
のを感じた。

《契約完了。魔力ライン接続、正常に魔力供給は行われています。

召喚システム正常起動。二体の使い魔の召喚成功を確認》

「今回の主はこんなに小さいのだな」

「まだ、子供じゃないですか！」

《仕方ないだろう！緊急事態だったのだ》

「緊急事態だからといって、何もこんな子供を…！」

《…王の適合者だったのだ》

「っ！？そんな…！」

話し声が聞こえる。

知らない声がいた。

目を向けると、黒い大きな狼が帝の背を支え、青い龍が彼らの近
くを飛んでいる。

「ふん、まさか、フェンリルとリヴァイアサンが出てくるとはな。

よほどその小僧は王としての才能があると見える」

「なんだ？怖気づいたのか、イフリート？」

帝の背を支えているフェンリルと呼ばれた狼が、挑発する。

「ほざけ！この我が貴様ごときに怖気づくなどありえんわ…！」

イフリートが激昂するとともに炎が猛り狂う。

「我が炎で燃え尽きるがいい!!」

帝に投げつけたものより巨大な炎を作り出し、放とうとする。だが、

「っ!? 動けんだと!?!」

イフリートの体には鎖が幾重にも絡み付いていた。

「ククツ、愚かだなイフリート。周りをよく見ておかんからだ」

鎖はフェンリルの足元からのびていた。

「リヴァイアサン、後は任せる。俺は動けんし、主もきつそうだ」

「…わかりました。すみません、イフリート、一瞬で終わらせてもらいます!!」

青い球体が形成され、身動きの取れないイフリートの体を貫いていく。

「ぐっ、ごはあ!!」

魔人は血を吐いて倒れる。

「もう、長くないだろうな」

「そうですね」

「…な、めるなあ!」

血を噴き出しながら立ち上がり、

「小僧、貴様だけでもっ!!」

最後の 一撃を帝に向けてふるう。

「主っ!!」

フェンリルとリヴァイアサンの焦った声を遠くで聞く。

だが、帝はそれを気にしない。

今彼に見えているのは、黒のロングコートを着た王がイフリートの攻撃をよけ、その胸に銀の剣を突き刺そうとしている映像。

- ああ、そうすればいいんだな。 -

帝は王の行動をなぞるように動き、いつの間にか持っていた銀の剣を魔人の胸に叩きこんだ。

何かを突き破る感覚。

生温かいものが手や顔、体にかかる。
それらを記憶に、胸に刻み込む。

忘れないように、自分がやったことを否定しないために。
生きるということは、何かを奪い続けるということだから。

「やるではないか…、小僧」

消え入りそうな声が耳に届く。

「…しかし、前と同じように殺されるとはな」

「…あ」

改めて言われると、自分は初めて意思あるものを殺したことに気づく。

虫などの言葉を解さぬものは、何度も殺してきた。

だが、今日の前にいる者はどうだ？

- 俺…は…。

「こんなことでおびえていては、戦いには向かんぞ？

…我を倒した小さき者よ、汝の名はなんという？」

「…日神…？…帝…」

「帝…か。良い名だ。帝、忘れるな。生きているものはいつか死ぬのだ。」

ただ、死ぬのが早いかどうかだ。

いずれ、汝も我と同じように一握りの灰になる…」

イフリートは赤い光を放ちながら消えていく。

光は帝の胸に吸い込まれていった。

そして残るのは少量の灰。

帝の意識は闇のに包まれていった。

第二話 〱契約〱（後書き）

神喰らいの魔狼フェンリル。

原初の龍、嫉妬の大罪を背負いしリヴァイアサン。

今回はこの二体に出てもらいました。

他の使い魔も出しますが、この二体はレギュラーです。

あと何体かレギュラー使い魔も出すつもりです。

粹としてはあと四体ぐらいですね。

一体は決まっています。

なのはシリーズのあるフラグをぶっ壊すためですね。

ほかは感想などを送ってくれた人のを使うかもしれない。

（暗に感想が欲しいと言ってますね。図々しくてすいません）

…まあ、そんなことはどうでもいいですね。

次の投稿を早くできるように頑張ります！

第三話 く力の理申く 前篇(前書き)

はい、お久しぶりです。作者の優しい水です。

なんか作ってたら分けた方が読みやすいんじゃないかね?とか思ったので分けることにしました。後編はまだできてないですけどね。

すいません!明日には投稿します!!

では、前篇どぞ!!

第三話 く力の理由く 前篇

「う…」

目を覚ます。

周りの景色はまだ色がなかった。

《起きたか》

《そのようですね》

ドユクスとあの本の話し声がした。

身を起こす。どうやらベンチに寝ていたようだ。

「…あれから、どれくらいたった？」

体は妙にだるく、紡いだ声もどこか疲れていた。

《一時間…といったところか》

「そんなにか…」

《ええ、始めて力を使ったのですからそうなくても仕方ありませんよ》

「説明、してくれるんだろ。この力の意味を」

帝は自分の手のひらを見ながら言う。

《ああ。その力はロード・オブ・ヴァーミリオン、紅蓮の王のものだ。

それに君は選ばれ、契約したのだ》

「…俺以外に適合者はいなかったのか？」

《この時代では帝、あなたしかいませんでした。他の時代で適合者はいましたが、私たちが作られた目的の相手が覚醒していなかったのです》

「目的？」

《そう、我々の目的は神々の阻止》

「は？紙？いや、ちよつと待て！神つてあの神か！？」

ドユクスの言葉に帝はまぬけな声を出す。

そして自分の近くで浮いている黒い宝石と赤い本を何か痛いもの

を見るような眼でみる。

《こら、そんな目で見るな。我らは変なことと言っていないぞ》
《ええ、これは事実です》

ドュクスと赤い本は点滅しながら、帝に抗議する。
「わるかったよ、ドュクス、それとえーと……。」

なあ、アンタの名前は？」

そういえば、名前を聞いていないことを思い出す。

《…紅蓮の魔導書、それが私の名前です》
「え？マジで？」

《本当だ。彼女に名前を正式につけるまえに王は死んだのでな。

そうだ、帝。契約したのだ、君が名前を付けるといい》
ドュクスは名案だとばかりに点滅を繰り返す。

「ちょ、ちよつと待て！なんか大事になってないか！！」
慌てて止めようとするが、もう遅く、

《それはいい考えです。ではマスター、私に名前を付けてください》
「俺、了承してないのに勝手に話が進んでる！てか、呼び方変わってない？」

《契約したのです。あなたは主。私は従者。ならば、主の名を呼び捨てにするのはおかしいでしょう？

さあ、そんなことより私に名前を付けてください。マスター》

「俺、そんなの気にしないのに……。しかも名前つけるの確定なのね」
《早くしてください》

「ごめんなさい、ちよつと待つてください！」

怒気を含んだ声で言われ、帝は焦りながらも考える。
「なあ、あんたは女なのか？」

先ほどのドュクスの言葉を思い出したので聞いてみる。

《はい、私は女性人格としてプログラミングされています》
「じゃルージユ、つてのはどうだ？英語で紅って意味なんだけど……」

《ルージユですか。安直ですね》

「うう、すみません」

自分でも安直だとは思ったが、それ以外でいいものが思いつかなかった。

《…まあいいでしょう。固有名称としてルージユを登録します》
本…、ルージユに象眼されている宝石がひとときわ輝く。

《よし、名前が決まったところで話を元に戻すでしょう》

頃合いを見計らい、ドュクスは帝の目の前に浮かぶ。

《先ほど言った神、正確に言えば帝、君たちの世界の神ではない》

「は？どいうことだ？」

ドュクスの言っていることの意味が分からず、首を傾げる。

《言葉だけでは理解は難しいでしょう。今画像を表示します》

ルージユの周りに大きなディスプレイが現れ、絵を映す。

「うお、すげっ！」

《驚いてないで画像を見てください》

映されるのは銀河系。

ただし一つではなく、数多くあった。

「？なんでこんなに映すんだ？地球が狙われてるんじゃないのか？」

疑問の声を上げる。

《違います。彼らはこの世界全てを手にしようとしているのです。

聞いたことはありませんか？他の銀河系にも生物がいるという考えを。

その考えは正しく、人間もいます。また、他の次元にも人間はいます》

ディスプレイにさらに多くの銀河系が映され、線で区切られている銀河系もあった。

《線は次元の壁、とを考えてください。干渉するにはかなりの科学技術が必要になります。

今の地球のレベルでは無理です。成功している世界もありますが、

今は関係ないですね」

「????」

話のレベルが高すぎてついていけない。

というか、小学生に理解できる域を超えている気がする。

《…透明な鏡が自分の周りにあると考える。その向こうに人がいて、鏡を壊さなければその人と話すことができない。自分は壊す道具を持っていないが、向こうの人は持っているかもしれない……》というのだ。理解できたか？

「な、なんとか…」

ドククスの説明を頭の中で再現し、理解する。

《…続けます。私たちが神と言った存在は彼らの世界では形を持ちません。しかし、別の世界に介入したときは形をもちます。

人間が存在する世界を好んで介入してきます。人間にとって脅威の存在の形をとり、近づき、惑わせ、自分たちにとって都合のいい世界を作り出していくのです。

なぜ人間がいる世界を選ぶかということ、想像力がある生物がいないと形を作ることができないからです」

「あ…」

頭から煙がでそうだ。ルージユの言うことは帝にとっては難しすぎた。

《鏡を自由に行き来できる幽霊がいたとしよう。

人間がいる前では姿を現し、動物の前では姿を見せない。人の前でとる姿は神と呼ばれる空想の、しかし人々にとっては恐れ、敬う存在の形をとるということだ》

またもやドククスのおかげでなんとか理解する。

「なあ、なんでそんな難しい言い方するんだ？」

帝はさつきから思っていたことをルージユに聞く。

小学生で理解できるのは少数な気がする。例えば、アリサとかすずかとか。

なのははどつなのだろう？

そんなことを思っていると、

《今、別のことを考えていましたね？》

「め、めっそうもないー!!」

異様に鋭いなこんちくしょう。

《まあいいでしょう。少しでも賢くなってもらおうという私の親心です》

ルージユはその体を反りかえらせる。まるで、どうだと言わんばかりに。

「…親ちゃんやん」

《何か？》

「なんでもないです」

変な関西弁が出てしまったが、気付かれなかったようだ。

第三話 く力の理申く 前篇（後書き）

はい、読んでくださってありがとうございます。

説明ばつかですいません。しかも勝手な考え。

何か指摘があればどしどし送ってください。読んでくださっている人のために改善していきたいと思います。

では、次の投稿を待っていてくださると嬉しいです。

第四話 く力の理由く 後編(前書き)

はい、みなさんこんばんはく、作者です。

すみませんでした！！日曜日に投稿すると言いながら木曜日になつてしまいました。

理由はいろいろとありますが、言い訳はよくないですね。

作者が全面的に悪いです。今後はこのようなことがないようにします。

説明はつかですが楽しんでいただければ嬉しいです。

では、どぞ！

第四話 く力の理由く 後編

「んで、俺にさせたいことって神様を倒すことか？」

帝は頭をかきながら思う。面倒なことだ、と。

しかし、誰かがやらなくてはならないことだとも、理解はしていた。

《そつだ。お前も嫌だろう？神の気まぐれで多くの人が死ぬというのは》

「…確かに、それを聞かされちゃあやるしかないわな」

そつ言つて、色のない空を見上げた。

見上げた空に雲はあつたが、動かない。

- 何かとても大事なことを忘れてる気がする。 -

「ところで、今何時かわかるか？」

ふと気になったので聞いてみる。

《現在の時刻は五時五十五分ですが、何か？》

それを聞いた瞬間、帝の顔から一気に血の気が引いた。

《？どうした、帝？顔色が悪いぞ？》

ドユクスの声も気にせず帝はベンチから立ち上がる。

「…い。…ばい。ヤバイヤバイヤバイヤバイ！！」

そつ言いながら、出口に向かって走っていく。

ドユクスとルージュは慌てて帝の後を追う。

《待て！どうしたというのだ、帝！》

《マスター説明はまだ終わっていません！》

「今日は早く帰らないと不味いんがっ！！」

二人（？）に説明しようとした言葉は、見えない壁にぶち当たったことで中断された。

帝は顔を強く打ち、涙目になりながら地面を転がる。

《何が不味いのだ？》

《因果ですか？》

一人（？）は的外れなことを聞いてくる。

「いたー！？なんで壁とかあんだよ！？あと因果違うー！！」

顔を押しえてはいるが、しっかりとツツこむあたり案外余裕な
だろう。

《結界が展開されているからな。そこがちょうど外との境目になっ
ているのだ。

で？何が不味いのだ？》

顔をさすりながら地面に座る。

「今日、五時までに家に帰って手伝いするって、父さんと母さんに
約束してたんだよ……」

《嘘を言っでごまかせばいいではないですか》

「ばれるんだよ。前に何で嘘ってわかったのか聞いたら、父さんは
お前が俺の息子だからだ！って言うし。母さんに聞いたら、父さん
と帝の嘘ならわかるわよーって言うし」

《父や母は偉大というわけか》

「そうなんだよ。……ってか早くこれ何とかしてくれー！」

両手で見えない壁を叩く。

《まあ待て。家に帰るなら我らも付いていこう。だがこのままでは
怪しまれてしまう。

別の形をとるぞ、ルージユ》

《…説明はどうするのですか？》

《後で帝に時間を作ってもらおうではないか》

《了解しました》

帝が何か言おうとする前に、ドクスとルージユは光出す。

光は一瞬で消え、そこには銀の剣で鏢の中央に赤い宝石が埋め込
まれたネックレスと、黒の宝石が埋め込まれた指輪が宙に浮いてい
た。

《これなら大丈夫だろう》

「…朝つけてなかったのに、帰ってきてつけてたら変に思われるだ

る」

《なに、困っている人がいて助けたお礼にもらったとでも言えはいだらう》

理由は先に考えていたのだらう。帝が疑問を上げたが、ドュクスはすぐに答えた。

「だから嘘はばれるって」

だがドュクスの答えはすぐに否定される。

《…鞆に入ればよいのではないですか？》

《「あ」》

ルージユの提案に二人はまぬけな声を上げる。

「それより早くこれをなくしてくれ！」

さっきまでのことをなかつたことにするかのようになり、声を張り上げた。

《…ルージユ》

《了解、元の空間に戻します。周囲に生体反応…なし。

結界、解除します》

その言葉とともに、目の前の空間にひびが入る。

硝子を割るような音が響く。

あまりの音の大きさに手で耳をふさぐ。

世界に色が戻り、動き出す。

近くに浮いていたドュクスとルージユをひつつかみ、鞆に乱暴に叩きこむ。

《こら！もつと丁寧に扱わんか！！》

《マスター、今の扱いは私も抗議します》

「うるさい！文句なら後で聞いてやるから今は黙ってる！！」

叫びながら出口に急ぎ、家路を急ぐ。

走り続けること十五分。

夜十時。

「疲れたー」

帝は客のいなくなったトワイライトの客席に座りながら呟く。

「おつかれ」

父、日神烈火がオムライスをもった皿を帝の前に置いた。

紅茶色の髪に赤眼。

何故日本人であるはずの彼があんな髪と目をしているかは謎だ。

「ありがと。そんでもっていただきまーす」

スプーンを手に取り、オムライスを食べようとしたが、突然伸びてきた手により皿を下げられてしまい、スプーンは宙をすくうだけだった。

「何すんだよ、母さん！」

オムライスを奪った人物。母、日神・？・クリスを見上げる。

純白の髪を左手でかきあげ、深い海色の瞳で帝を見つめる。

「何って、罰？今日手伝うって約束してたよね？裂、まだ理由聞いてないんだからご飯あげちゃだめでしょ。さ、帝？なんで遅れたのか母さんと父さんに言ってみなさい？」

笑顔が逆にすごい怖い。

彼女が持つている皿にひびが入る。

烈火も引いている。

「ひ、人助けしてたんだよ！」

「ふーん、擦りむいてたりしてるけど。なに？喧嘩の仲裁？」

「そうそう！」

「嘘、ついてないわよね？」

「ついてない！」

クリスは帝の目をじっと見る。

「ま、いいわ。ご飯食べたなら寝なさい」

そう言っつて皿を机に戻す。

ほっとしたのもつかの間、

「明日の訓練は四時からね」

地獄に叩きこまれる。

「ま、待って！今日宿題たくさん出されたんだ！..」

「クリス...」

「...はあわかつたわよ。明日はなしにしてあげる。そのかわり、今週末の休みは朝四時からね」

何を言っつても結局地獄だった。

「最悪だ...」

自室の机で宿題をしながら呻く。

《もういいか？》

《説明の続きをさせていただきます》

「なあ、お前らは鬼か鬼なのか？」

手に力が入りすぎて鉛筆の芯を折ってしまっ

しかしよほど力を入れたのだろう、鉛筆自体も折れてしまっ

《まあそう怒るな。で、説明をするぞ》

《王の力は特別です。世界を支える紅蓮の魔石、アルカナを己が身に宿すことで本来ならこの世界で存在することができない異界の魔物、神獣、魔神、神、天使、悪魔、そして英雄と呼ばれるものまで召喚することが可能なのです》

「俺許可してないよね？聞いても覚えられないよ？」

机に突っ伏し髪をいじる。

宿題はまだ終わらない。

《アルカナを身に宿すと不死になります》

「俺死なくなっつたのか!？」

椅子から勢いよく立ちあがり、ルージュたちを睨みつける。

「そんなこと聞いてないぞ!!」

《落ち着け。不死といっても完璧な不死ではない。》

同じようにアルカナを身に宿したものに致命傷を与えられたら死ぬな》

椅子に座りなおし、手で顔を覆う。

「なんだよ、マジで化け物じゃねえかよ」

どこか苦しそうに声を出す。

《すまん。我らと契約した時、ルージュに封印してあったアルカナをお前の中に移した》

「…もういいよ。そうしなきゃあん時で俺は死んでた」

帝は諦め、顔を上げる。

「…ずいぶんと酷い運命だ」

「…俺を助けた奴らは俺が契約した力で召喚したってことだよな？」
疑問に思ったので尋ねてみる。

漆黒の巨大な狼、フェンリル。

青色の鱗を持つ龍、リヴァイアサン。

手に入れた力で呼び出した者たち。

やりようによっては世界を支配することもできるな、と思い、すぐに否定する。

自分は世界を支配するような器ではない、そう思うからだ。

《そうであり、そうではないと言えます。あの時はマスターの命の危険でしたので、緊急システムを使用しました》

「緊急システム？」

《はい、マスターの命が危険と判断された時にのみ使用が許されたものです。》

マスターは私たちと契約したばかりです。使い魔たちとの契約はまだされていません。

ですが、緊急システムは契約していない使い魔を大量の魔力を使い、無理やり召喚します》

「契約してないってどういうことだ？お前らと契約したから使い魔ってのもしたんじゃないのか？」

《そう思われるのも当然でしょうが、違います。彼らは前の王の軍勢です。マスターに従うかどうかは彼ら自身に決めてもらいます。

他人の力の借りものとしてではなく、マスターの力で彼らをあなたの軍勢の配下にするのです》

《いくなれば我らは鍵だ。帝、お前はまだ鍵を手にしただけにすぎない。

お前が貸家の大家だとして。使い魔たちは部屋に住みたいと思っっている。

お前は我ら、鍵を使って、お前自身の力という名の部屋を見せる。使い魔たちはそれを気に入れば、お前の部屋に住み、家賃という名の力を渡す。というわけだ》

ドユクスとルージユの説明を交互に聞く。

《なに、今全てを理解しろとは言わん。頭の片隅にでも覚えておいてくれればいい》

《なんてことを言うのですか、ドユクス。一度で覚えてもらわねば困ります。

…説明するのは大変なのでから》

「ルージユ今本音言っただでしょ！！」

夜は更けていく。

そして運命の歯車はかみ合い、少年は戦いに身を投じることとなる。

第四話 く力の理申く 後編(後書き)

読んでくださった方、ありがとうございます。

自分のような駄目作者が書くこの作品を待っていてくれた方、ほんと申し訳ないです。

マジで今後はこんなこと起こさないのを見捨てないでください!!

次回は日曜日に投稿するつもりです。

バイトが入っちゃいましたが作者は読んでくださっている人のために頑張ります。

キャラ紹介（前書き）

みなさんこんばんは、作者です。日曜日までには投稿するという宣言どおり投稿できました。

え？話を投稿しろって？すみません！まだできてないんです！ですが、重要な資料がやっときたので、そんなに時間はかからないと思います。

後書きでちよっとお聞きしたことがあるので、感想送ってくれると嬉しいです。

キャラ紹介

キャラ紹介

名前 日神・？・帝

身長 138センチ

体重 36キロ

容姿 上の下。白髪の髪をうなじのあたりで紐でむすんでいる。伸ばしているのはひと房だけ。

紅眼。コンタクトを入れようかと思っていたが、なのはたちに綺麗だから隠しちゃだめだと言われ、そのままで登校している。家族構成 父 母 祖父 祖母 (祖父母は同じ市に住んでいるが、家は別)

いたって普通…、ではない小学生。家のレストランの手伝いを学校から帰ってきてからよくしている。また、朝には母クリスからの訓練を受けているので、体力は高校生なみにある。

家に帰る途中、結界の中にはいつてしまい命の危険に。その中でドクス、ルージュと契約。戦いの運命を背負うことになる。

ドクス

形状 黒の宝石。現在は黒の宝石が埋め込まれた指輪。

使命 紅蓮の王を教え導くこと。

帝と契約したデバイス。

前回の王のことを知っている。彼の最後もみとった。

あまり王のことは話そうとはしない。帝には自分で歩いて考えて欲しいため。

基本は戦い方を教える。

ルージュの説明の補足やをすることが多い。

ルージュ

形状 剣が埋め込まれた赤の本。現在は銀の剣の鏢に赤い宝石が象眼されたネックレス。

使命 紅蓮の王につき従うこと。

帝と契約した特殊なデバイス。

説明をすることが多いがじつはめんどくさいと思っている。

帝には自身に記されている能力の使い方を教える。

日神烈火

身長 180センチ

体重 70キロ

容姿 上の下 紅茶色の髪に紅眼。髪は短く切っている。

純粹な日本人であるはずなのに、外国人風な顔をしている。帝の父。レストラン、トワイライトのコック。和洋中全て完璧につくることができ、一流シェフ顔負け。ある高級ホテルから誘いがあつたが、断り商店街の近くでレストランを開く。

日神・？・クリス

身長 170センチ

体重 58キロ

容姿 上の上 純白の髪に深い海色の瞳。髪は肩口で切無造作に切られている。

帝の母。元軍人。家事はできるのだが、料理は致命的。一口で意識を失い、病院に担ぎ込まれるほど。今でもお客に告白されるほど人気。全て断っているが。

帝に朝訓練を付けている。軍隊式なのでかなりきつい。

キャラ紹介（後書き）

はい、説明終了です。話が進めばまたやるかもしれないですね。で、聞きたいことというのは、みんな大好き淫乱ちゃんをどうするか？ということ。知っている人もいると思いますが、淫乱ちゃんには妹がいます。

妹も含めて帝といちゃいちゃさせるか、妹なしで他の擬人化メンバーと淫乱ちゃんといちゃいちゃさせると悩んでいます。

なのはたちがいちゃいちゃメンバーなのは確定しています。

ヴァーミリオン勢をどうするかなのです。

送ってくれたらそれを参考にするというだけで、話を書かないというわけではないのでご安心を。次の話はなるべく早く書けるように頑張ります。

第五話 訓練前篇（前書き）

お久しぶりでございまーす!!

お話ができたので投稿させていただきます。また前後篇です。

一話にまとめられないのかって？

まとめられません!!（どーん!）

ああ! すいません石を投げないで!!

と、とりあえずどぞ。

第五話 く訓練く前篇

満点の青空。

雲なんて一つもない。

だが、

「あー、くそ鬱だ。なんでこんな日にかぎって一時間目体育なんだよ……」

ため息をつく。

眼の下には酷いクマができていた。

昨日出された宿題を必死にやった結果なんとか朝までにはできた。ドユクスとルージユが説明をしていたので、なかなか進むなかったのも寝不足の理由だ。

「寝不足で出席しないなんて許されないもんな……」

今日の授業はドツジボール。

帝の前をボールがかなりの速さ飛んで行く。

「さつさと当たりなさいよ!!」

投げているのはアリサ。

空を見上げながらも、よけ続ける帝。

五分ほど前からこの状況だ。

アリサが帝に向かってボールを投げる。

帝が避ける。

アリサのチームのメンバーがボールを返す。

アリサがキャッチ、また投げる。

また帝が避ける。

これの無限ループ。

《マスター》

「うお!!」

突然のルージユの声に驚き、避けるのが遅れ鼻先をボールがかす

める。

「避けるなー!!」

「無茶言うなー!!」

叫ばれたので叫び返す。

《帝、声を出すと怪しまれる。心の中で声を出すようにしろ》

《えと、こうか?》

ボールはよけ続けながら試す。

《そうだ、それが念話というものだ》

《へへ。で、何の用だ?》

《今日から訓練を行います》

「はあ!？」

言われたことに驚き、またボールがかすめる。

《戦闘訓練と魔法訓練、それから契約もしていただきます》

《やること多すぎだろ!!》

《死んでもいいならしないが?》

ドュクスという言葉で思考が止まる。

空を見ていた顔を下げる。思い出すのは赤の魔人、イフリート。

自分にふるわれた殺す意思を込めた攻撃。

炎の熱さ。周りが燃えていく風景。

何かを突き破る感覚。

肌を感じる自分以外の血の熱さ。

《やっぱり、俺を狙ってくるか?》

《そうですね。マスターは唯一彼らに対抗できます。

あなたを殺せば彼らは安心してこの世界のすべてを支配することができる。

なら、障害となりうるものをほうっておくわけがないでしょう》

そう。選んでしまったのだから。

あの時生きることが望み、誰かを殺し、血に濡れることを彼らと契約したのだ。

「ああ、ほんとに世の中つてのはままならないな……」

そう呟いて、また空を見上げる。
世界の眩しさにめを細める。

「みーくん!!!」

「あ?」

突然なのはに呼ばれそちらに顔を向ける。

目に映ったのは視界いっぱいにまでせまっているボール。

視界の端でなのはとアリサが驚いている。

まず、避けないことに驚いているアリサ。

帝がボールに気が付いていないことがわかって驚いているのは、
ヤバい、そう思いからだを動かす。

だが、顔面すれすれ近くまでできておいていまさら回避は無理な話
だ。

「ぐあ!!!」

クリーンヒット。

顔面に綺麗に入った。

後ろにのけぞり、倒れていく。

いい具合に入りすぎたのだろう、意識が落ちていく。

最後の瞬間に見えたのはさすが。

当てないつもりで投げたのに、急に帝が顔を上げたことによりあ
たってしまったて驚いている。

そんな表情をしていた。

いいもんもってるじゃねえか…。

そう思ったのを最後に意識は切れた。

「うつ…」

目を覚まして最初に見えたのは、少し黄ばんだ白い天井。

かすかな薬品のおいと、誰かの寝息。

俺の近くか…。ってか両腕が重い?そう感じ身を起こす。

帝の腕を使い気持ちよさそうに寝ているのはとすずかがいた。

「何でこんなことに？」

「アンタが気絶したから保健室に運んだのよ」

口を衝いて出た疑問に答えたのは、しきりを開け帝たちのいるベッドに近づいてきたアリサだった。「もう放課後よ？なのはたちがどれだけ心配してたと思ってるの？」

そう怒りながら、隣のベッドに腰掛け足を組む。

「それは悪かったな。で、お前は心配してくれなかったのか？」

「あたしだって心配したわよ。でもなのはたちほどじゃないわ」

「そっか。本当悪いな。それとありがとう」

「フンっ！」

そっぽを向くが顔が少し赤い。

「ん…」

そんなことをしていたら、二人が起きた。

「よ、よお」

「…みーくん（帝君）！」

目覚めた二人はこれでもかと帝に顔を近づける。

「大丈夫なの！？」

「ごめんね、帝君なら避けられると思って」

「痛いとか気持ち悪いとかない！？」

「今度からは気をつけるね」

「とりあえず二人とも落ち着け」

一気に話されて目を白黒させたが、ほうつておくともまだ話しそうなので途中で止める。

「俺は大丈夫だよ。昨日徹夜したからずっと寝てただけだ」

「何で徹夜なんてしたの？」

「忘れたのか？昨日俺だけ宿題めちゃくちゃだされたら？」

「…あー」

その答えでなのはとすずかだけでなく、アリサも苦い笑みを浮かべる。

「つてあんたの自業自得じゃない」

即座につつこんでくるアリサ。

「まあそうなんだが、あんまり気にすんなよ。それより放課後なん
だろ？さっさと帰ろうぜ？」

くつついていた二人を引っぺがし、ベッドから降りる。

「あ、ちよつと待ちなさいよ！」

「みーくん待ってー」

「……」

さすがが何の反応を示さないのをいぶかしみながらも、着替えや
鞆を取りに行くために保健室のドアに向かう。

手を伸ばし、開けようとすると、

「荷物ならここにあるわよ」

アリサの言葉に動きを止め、振り返る。

帝の荷物を持って立つアリサとそれに驚いている二人が見えた。

「なのはとすずかはホームルームが終わったとたん教室を出てつた
から。」

しょうがなくアタシがあんたの荷物を持ってきてあげたのよ。

感謝しなさいよ！！」

顔を赤くし横を向きながら一気に言い切る。

その後ろで「アリサちゃん、ずるい（のー！）」とか聞こえるが
意味がわからない。

「あ、ああ。ありがとう。でも、こんなこともあるんだな」

「何よ？」

少しだけこちらの顔を向けたアリサに笑顔を見せながら、

「アリサがこんなに優しいなんてな？」

「うっさい、バカー！！」

拳が飛んできたが、難なく避ける。

「ははは、悪い悪い。本当に感謝してるんだぜ？」

あと、着替えるから出てけよー！。

それとも何だ？

俺の裸が見たいのか？」

軽口をたたくと、三人は顔を赤くし急いで保健室から出ていった。
一息。

「ふう、そんなに嫌がらなくてもいいじゃないか……」

《本気で言っているのか？》

《うお、ドクスイいきなり話しかけんよ！びっくりするだろ》

《慣れてください。それより、先ほどの言葉は本当に本気で仰っているのですか？》

《本気だけど？》

だってあんなに早く出てっただんだけ？》

《はあ、確かに羞恥もあっただろうが……。彼女らは苦勞しそうだな、ルージュ？》

《ええ、そうですねドクスイ》

二人はどこか疲れた声で話す。

「？」

首を傾げながらも着替えは続けていく。

《今日お前の予定が全て終わったら、ルージュに登録されている魔法を使い訓練を始める》

《ちよつ、あれ冗談じゃなかったのか！？》

声に出してしまいそうだったが、三人が外にいるのを思い出し、何とか思いとどまる。

《冗談ではありません。》

訓練の最後には使い魔との契約もしっかりとさせていただきます》

魔人を捕らえた巨狼。

その体を魔力球で貫いた銀色の龍。

彼らのことを思い出し身を震わせる。

《あんなのと本当に契約なんて出来るのか？》

疑問をぶつける。

あんな光景を見たら誰もが思うことだろう。

《それはマスター次第です。》

それに力で挑むだけというわけではありません。
意思や知識を求められるかもしれませんが」

《そっか…》
服を整え、息をつく。

《ま、だいたいわかったよ。覚悟決めとくか。
とりあえずもういいよな？何かあるんだったら帰ってからにして
くれ。

念話切るぞ？》

《わかった。では後でな》

《それでは、マスター頑張ってください》

ルージユの言葉の意味に首を傾げながらドアを開く。

「遅いわよ！！」

「みーくんおそいよー」

「悪い、つてあれ？すずかは？」

三人で待っていると思っていたので尋ねる。

「何か用事があるの思い出したから先に帰るって」

「そっか」

先ほどのことを思い出し、少し心配になるが先に帰っているのは仕方がない。

「じゃ、俺たちも帰ろう？あんまり遅いと心配されちゃうからな」
そう言っ二人を促し、帰途に着いた。

第五話　く訓練く前篇（後書き）

はい、読んでくれた人に多大の感謝を！

後編はまだかつて？まだです！！

ああ！こんどはミサイルが！？

すいません、構成は頭の中でできているんですが、文章に起こせていないんです。日曜日までには後編を投稿できると思います。

…前にもこんなこと言っていましたね。こ、今回は守ります！！

こんな駄文を読んでくれる方、今回こそは約束を守りますのでどうかみすてないください。

第六話　く訓練く　中編（前書き）

中編をお送りします。え？前後篇って言ってなかったか？やだなー、そんなこと知りませんよ。ああ！！今回は核弾頭！？

ごめんなさいふざけました。

理由としては書いてたらかなり多くなったからですね。実際は多いのかわからないんですけどね？

後今回のは書いてて自分で首を傾げることが多かったです。

違和感があるぜ！！ってかたはどうぞ感想をば。

第六話 く訓練く 中編

「じゃあまた明日なー」

「ばいばい、アリサちゃん！」

「気をつけて帰りなさいよ！」

アリサは車の窓から顔を出して帝たちに声を飛ばす。
なのは手を大きく振り、帝も軽く手を上げる。

車が走っていくのを見送り、帝はなのはに顔を向け、

「さて、俺たちも行くか？」

「うん、そうだね」

なのはは帝に抱きつく。

「おい、歩きづらんだが」

「ぶー。みーくんはやなの？」

「別に嫌がってはないが恥ずかしくないか？」

「いーの」

輝くような笑顔を見せられたのだから黙るしかない。

「家の近くまでいいいな？」

歩きながら尋ねる。

「えー、家に来てくれないの？」

「やだよ。恭也さんにあいたくねえもん」

一度なのはをくつつけたまま高町家に行ったら、木刀を持ち、般若の形相をした恭也さんに追いかけまわされた。その後、高町家の最高権力者である母桃子さんに肅清されたそうだった。

「むう、帰ったらお兄ちゃんお仕置きなの……」

何か黒い発言が聞こえるが気にしない。

「ここまででいいだろ」

「もう着いちゃった…」

他愛ない話を続けていたら高町家に着いた。

かなり大きな純和風の家屋。

「ほら、そろそろ離れるよこんなところ恭也さんに見られたら…」

「見られたらどうなるんだ？帝？」

「…え？」

聞こえてはいけけないはずの人の声。

恐る恐る振り返る。

そこには二人の男女が立っていた。

「恭也さん…美由希さん…」

「やつほー、帝君。そんでもってお帰りなのは」

「ただいま。お姉ちゃん、お兄ちゃん」

なのはが女性と男性に答える。

黒の髪をポニーテールにし、眼鏡をかけた高町美由希という名前

のなのはの姉と、黒の髪を短く切った高町恭也という名前の兄。

「…帝、何故お前はなのはと腕を組んでいる？」

「ええと、それは…」

「なんだ？理由があるなら言ってみる？」

「…成り行き？」

「よし、斬る！！」

「なんで！？ってかどこから出したんスカその木刀ー！？」

なのはを引っぺがし全速力でその場から離れる。

「待て！逃げるな！！お前を殺す…！！」

「わあ、そのセリフすっごい似合ってる！！

ああ！そんなこと言ったらすごい近くに！？」

地獄の鬼ごっこが始まった。

「くそっ、酷い目にあった…」

さつきまでのことを思い出す。

帝は捕まり滅殺されかかったが、なのはが恭也の肩をつかみ、

「お兄ちゃん…、ちよつとO・H・A・N・A・S・Iするの」

「な、なのは？どうした？そんなに俺の肩に力を入れて握ると肩が壊れるように痛い！！」

「やりすぎだよ？みーくん、お兄ちゃんとO・H・A・N・A・S・I

Iがあるから今日はここでお別れね？」

「気をつけて帰るんだよー」

「あ、うん。じゃまたな」

「くっ！いいか帝！！俺が駄目でも第二第三の俺ぐあっ！？」

「うるさいの」

最後に後ろを振り返って見たのは、ロープで縛られ倒れた恭也さん。

顔に返り血を付け、笑顔でこちらに手を振るなのは。

苦笑している美由希さん。

「いつからなのははあんなにバイオレンスになったんだ…」

記憶を探るがわからない。

かなり昔からあの光景を見ている気がする。

一番古いのもあれが起こっていた。

「いつか恭也さん死ぬんじゃないかな？」

「…そうなるとお姉ちゃんが悲しむよ」

「そうそうお姉ちゃんが…？」

聞きなじんだ声が聞こえたので、疑問に思い横を向く。

「すずか？何でいるんだ？」

帰ったと思っていたすずかがいた。

「えつとね、その、帝君。何か困ってることとかない…かな？」

「はい？」

何を言いたいのかわからない。

いや、わかるが理解ができないのだろう。

「なんでそんなことを？」

「えと、今日のことです…」

「ああ…」

帝の気絶の原因はすずかである。ならば、

「…何かしないところか」

すずかは顔を打つ向かせてしまう。

「そんなことしなくてもいいんだぜ？あれは俺のせいでもあるんだし」

「でもっ！…！」

声を張り上げる。

「…少し話そうか」

公園を見ながらそう呟く。

何か話さなければならぬのに沈黙が続く。
困ってること。

それを話せば帰ってくれるだろう。

しかし、

…簡単なことでは帰りそうにないな。

だから、

…話すしかないのか？

《どうするのだ帝？》

《マスターの意思を尊重しますよ》

二人の声が頭に響く。

空を見上げて考えを巡らせる。

「なあ、すずか。聞いた話なんだけどさ」

「うん？」

すずかがこつちを見ているのを感じるが、見上げていた視線を彼女に向けることはなく、下に落とす。

「ある人が突然すごい責任を押し付けられたんだ。まあ、その責任

をもたないとマズイ状況だったつてのも関係してるけど」

視界の端で彼女の顔を見ると、何が言いたいの良く分かっていないという表情だった。それに苦笑しながらも続ける。

「本人としては諦めてるし、覚悟もしなきゃいけないことはわかってるんだ。」

その責任の内容のことは誰にも話しちゃいけないと考えてるんだけど、でも誰かに話したいとも思ってる」

「何で話しちゃいけないの？」

「巻き込まれちゃうからだ。それほど責任つてのが重くて、つらいんだよ」

「……そう」

また沈黙が降りる。どれほど時間がたったかわからない。

「…私はね」

「ん？」

「私の考えだけど、その人の友達だったら話して欲しいって思うよ。その人のことが大事だから。巻き込まれてもいいって思う。」

でも自分から聞きに行こうとは思わない。その人が考えて、話していいって思えるようになるまで待ちたいな」

「……そっか」

夕暮れ時の赤い空を見上げる。目を閉じて思う。

……まだ俺の心は整理できていない。すずかは巻き込まれてもいいって言ったけど、俺は嫌だ。彼女を、彼女たちをあの危険な、血にまみれた世界に近づかせたくない。いつか、この責任にかたがついた時、彼女たちがまだ友人でいてくれるなら、笑い話として話してもいだろう。いや、血まみれの話は笑いにはならないか。

「すずか、ありがとな。その人にもすっかり伝えとくよ。ためになるぜってな」

「大人の人なんじゃないの？小学生の考えがためになるとは……」
苦笑しながらベンチから立ち上がる。

「いや、考えが柔軟な人だからよ。受け入れると思うぜ。それより

「家まで送ってどうか？」

「大丈夫だよ、迎えに来てもらうようにするから」

「さっすがお嬢様」

第六話 　　〜訓練〜 　　中編（後書き）

すずかフラグが立ちました。あんまりうまく書けていない気がします。

すずかルートなのかと問われるかもしれませんが、タグに書いてあるようにこれはハーレムです。どんどん増やしていきましょう。

内容を変えました。次の話も変えるつもりです。長い間放置していてマジですいませんでした。これからは新しい気持ちで書いていこうと思います。

では、また！！

第七話 　↳ 訓練↳ 後編 1 (前書き)

遅くなつてすみませんした!!

しかもまだ続くという。

ああ！パンツァーファウスト向けでないで肉片になっちゃいますか
ら!!!!

…詳しい言い訳は後書きにて。

第七話　〜訓練〜後編1

あのあとは学校でのことや、家でおきたことなど、普通な話で盛り上がった。

ふと出入り口を見ると、黒塗りのリムジンが止まっていた。

「ずいぶん前から待たせてたみたいだな」

「…そうだね」

顔を見合わせて笑う。

「じゃ、また明日な。すずか」

「うん、また明日ね帝君。……待ってるからね」

車に乗り、家に向かうのを見送る。

「待ってるか」

《随分気を使われているな》

《いい娘ですね》

「そうだな、いつか話せるように頑張るしかないんだろうな。つか話したら絶対怒られる。特にアリサ。『何ですぐ話さなかったのよー!?!』ってな」

口に出しただけで、その光景が想像できて笑みがこぼれてしまう。

《ああ、あの元気な少女か。彼女ならそう言うだろうな》

「だろ?」

《マスターの周りにはいい娘が多いですね。で?誰が本命なのか?》

「本命も何もあいつらは友達だけど?」

《……ドクス》

《ああ、彼女たちは本当に苦労しそうだな》

二人の会話に首を傾げながら帰路を歩く。

「ただいまー」

「おかえりー」

家に帰ると父、烈火が右手にケーキ用のナイフを持ち、左手に皿を持ちながら出てきた。

「手洗いうがいしてこいよー。じゃないと今日のおやつ、ブルーベリータルトはやらんぞー」

「りょーかい。母さんは？」

洗面所に向かいながら尋ねた。

「クリスは親父とお袋のところまで料理修業…」

それを聞いた帝は動きを止める。

「それは…大丈夫なの？」

「大丈夫…だといいなあ」

烈火は涙目になりながら答えた。

クリスは料理が作れない。

掃除や洗濯などは普通にこなすのだが、なぜか料理だけは壊滅的だった。

キッチンが爆発するということは起きたことはないが、彼女が作ったものは見た目は普通なのに味が最悪だった。

帝はクリスから受ける訓練では死にかけたことはない。しかし、彼女が作った料理を口にしたら三途の川を渡りそうになったことはあった。

その時のことを思い出す。

船の渡し守のところまで行き船に乗ろうとしたら、渡し守が「君まだ寿命来てないでしょ？臨死体験するような年でもないでしょうに。ほら、帰った帰った」と言われ目が覚めた。

その後何度かその渡し守にはお世話になっていて、今では友人だ。そのことを父に言ったら、「ああ、あの人か。お前も世話になってんだな。俺はこの前話してたら愚痴を言われたぞ？何でも最近人間がよく死ぬから仕事量が増えたんだってよ。その癖に閻魔は給料上げないとか。しかもしゃべってたらいらいらしてきたんだろう

な。俺を川に突き落とそうとしゃがつてな？さすがにここで落とされたらまずいと思ったわけよ、俺も。んで伸ばしてきた腕つかんで、ボデイに一発キツイの入れて川にぶん投げてやったよ」その後の船を漕ぐのが大変でな、と父は大笑いしていたが、渡し守を川にぶち込むつてあんただんだけ鬼なんだと思った。

あとあの時彼がずぶ濡れの上に、涙目だったのはあんたのせいかな。かなり話がそれた。

「…三人とも大丈夫かな？」

「うまくやつてるだろ。AEDまで置いてんだぞ？」

手洗いを終え、思う。

救命装置を置かなければ食べられない料理は料理と呼んでいいものなのだろうか、と。

「今お前が考えたことは正しい。だがクリスの前で言うなよ？」

俺らにうまいものを食わせようつて頑張つてんだから」

「言わないよ！つてか料理修業するように父さんが勧めたの？」

ナイフを手で回しながら烈火は答える。

「どう思う？まっ、言つちまうが本人からだよ。何回も俺らを臨死体験させたのがよほどシヨックだったんだろつよ？その日かなり真剣な顔してな？俺に？義父さん義母さんのところで修業してくる！つて家を飛び出して行ったんだよ。その日店開けてんのにだぞ？」

その時の光景を思い出してるのだろう、烈火の顔には濃い笑みが張りついていた。

「…父さん今別のこと思い出してるでしょ？」

鼻の下伸びてるし、顔がゆるみすぎててだらしない」

「おっと。楽しいことまで思い出しちゃったぜ。」

帝、お前にはまだ早いからな？」

両親が愛し合っているのはいいが、

「息子にナイフ向けんなよ…」

「気にすんなよ！これも愛情表現つてやつた」

「そんな愛情は犬に食わせてしまえ」
ため息をつく。

「はあ、ところで父さん……」

「あん？なんだ？恋愛相談か？」

「相手は誰だ？なのはちゃんか？すずかちゃんか？アリサちゃんか？それとも新しい誰かか？」

俺的には最後のがお勧めだ。俺がそれに賭けてるからな」

「違えよ！つーか息子の恋愛で賭けごとしてんな！」

あとその賭けに参加してんのは誰だー！？」

「今名前を出した子の家族だ。一部例外はいるが。」

大穴は全員だな」

ニヤニヤしながら帝を見る。

そしてそのすぐ後に聞こえた、帝の頭の中の何かが切れる音。

「全員なんてねーよー！！」

烈火に向かつてうがいをしようと思つて持っていたコップを投げつける。

コップはかなりの速さを持って烈火に向かう。

避けるか受け止める、普通はどちらかの行動を取るだろう。

だが、彼が取った行動は、

「おいおいおい……」

右手のケーキ用ナイフを振り上げ、

「あぶねーだろーがよつと」

切り裂いた。

そして半分になり落ちていくコップを足で蹴り上げ、左手の皿に載せた。

「くそつ！人外め！」

「俺が人外ならお前はその息子なんだから、お前も人外だろうがよ？」

笑みを持つて返された言葉に二の句が告げられなくなる。

「さっきの答えな？全員なんていうハーレム展開考えたのはクリス

だぞ」

「母さーん!？」

上を向き吠える。

が、そんなことをしても無駄だとすぐに気づき、うなだれる。

「つーかそんな展開絶対に来ない、あり得ない。なのはたちは友達だし、あいつらもそう思ってるだろーよ」

「……お前ほんとあほなのな」

あきれながら烈火は愚息を見る。

「何だこのアホ親父ー!？」

「おまつ！親に向かってアホとはなんだこのバカ息子ー!!」

互いにのしり合うこと数分。先にねをあげたのは帝だった。

「くそつ！人が真面目に話そうとしてるのに、何で口喧嘩になってるんだよ！」

「なんだ？真剣な話があったのか？だったら真剣に聞いてやろう。少し待て」

そう言っただけ烈火は自分の顔を揉む。

さっきまで緩んでいた顔が引き締まる。

「よし、いいぞ」

「もういいよ。そんな空気じゃなくなった」

「人がせっかく真面目にした途端にやめやがって、気になるじゃねーか。話せよー」

「だからいいって。……いつか話すかもしれないけど」

「…わかった。気長に待ってやるさ。」

あーやだやだ。家の息子は成長が早くて面白くない。もっと悩めよー。親を頼れよー」

そう言いながらタルトを皿ごと渡してくる。

「悪かったな面白みがなくて。だけどそういう風に育てたのはあんたらだぞ？」

皿を受け取り、キッチンによって飲み物をとってから自室に向かった。

第七話 　　〜訓練〜後編1（後書き）

いや、マジですんません。放置期間長すぎですね。これからはこんなことないように頑張っていきます。

話しを作る気力がなくなるは、欲しいゲームはガンガンでは、単位はおとしまくるは、バイトが忙しいやら、もう自分でもどうしようもありません。あれ？ゲームは理由にしちゃ駄目じゃね？まーいつか。なんてダメっすよねすんません。とりあえず今日は内容の変更に入れようと思います。

第八話　〜訓練〜後編2（前書き）

お待たせしました〜。え？遅すぎる？やだなあーそんなに遅いわけ…。

めちやくちや遅いですね。すみません。しかも今回一番長いと思います。てか戦闘描写むずいっすね！？イフリート戦はあんまり戦つてるとは言えないし…。

ま、まあそんなことより楽しんでいただければ幸いです。

第八話 訓練後編2

《では訓練を始めよう》

机の上に置いたドククスが明滅する。

夕食を終え、自室に戻って帝は彼らと話す。

「なあ、これはたから見たら変人じゃないか？」

宝石とアクセサリーと話す少年。

…友達いない子みたいじゃないか。

《気になるな。私たちは気にしないぞ？なあルージユ？》

《ええ、そうですね》

「少しは気にしてくれ…」

頭が痛くなってきたが、話を進めなければならない。

「んで？どうやって訓練すんだよ」

《ルージユに記録されている魔法を使う》

「どんなのなんだ？」

《時を止めるようなものだ》

沈黙が降りる。

帝は頭を抱え思う。

…何言ってるんだこいつ？バカなんじゃねえか？イヤ、少し待て。

機械にバカとかあんのか？ああ、なんだ壊れてるだけか。

その結論に至り、ドククスを生温かい目で見る。

《こら、私をそんな目で見るんじゃない。何も変なことはいっていないぞ》

《時間を止める…という言い方がまずかったのではないですか？

内容としては対象を指定し、マスターの魔力で別の小さな世界をこの世界の中に作るのです。

対象とマスターを小さな世界の中に取り込み、その世界にいる間は
この世界の時は進まないというものですね》

一息。

《戦闘中での使用には向きません。理由としては二つあります。

一つ目としては単純に燃費がかなり悪いということですね。戦闘にも魔力を使用するのに小さな世界の維持にまで魔力を割いていてはアルカナを宿し、ほぼ無限の魔力の持ち主であるマスターでもさすがに魔力切れになります。

二つ目は先ほども言いましたように対象を指定するという事です。小さな世界にいる間はこの世界に干渉することは不可能です。敵をこの世界に残しておいては攻撃はできません。ならば敵も対象に含まなくてはならない。ですが敵も対象に含んでしまうとそのまま戦闘するのとなんの変わりもありません。以上のことからこれをを使用したまま戦闘をするということは、こちらがハンデを背負って戦うということになちますね》

相変らずルージュの説明は小難しくよく分からない。もっと簡単に説明はできないものか。

唸りながらそんなことを思う。

《大きなプールを想像してみる。そこに水を張り、凍らせる。それがお前がいるこの世界だな。

その一部を削り空間を作る。できた空間に水を入れる。水の部分はお前が魔力で作りに出した世界だ。

水の中で動けるのはお前とお前が選んだ奴だけ、とそういうことなる。

ところでルージュ、何故毎回私が解説をしなければならないのだ？

お前が噛み砕いて説明すればいいだけだろう？》

《嫌です。そういうことはドクスの役割です。それにドクスもセリフが欲しいでしょう？出番も増えるんですよ？

よかったですね。解説役という大きな仕事が入って》

《前半無視して言うが、変わってやってもいいんだぞ？》

《結構です。…めんどくさいじゃないですか》

《貴様、今本音言っただろう！？》

いつの間にか喧嘩をしている二機。

…やっぱりこれまじいよなあ。

一人そんなことを思うがもう口にしない。

そんなことより、

「なあ、訓練するんじゃないのか？」

《そうでしたね。では魔法を発動の準備をしますので少々お待ちください》

《こら！ルージュ話は終わっていないぞ！！》

なんか親みたいだなと思う。

《術式検索…。該当。マスター術式名を》

頭に言葉が浮かぶ。

「ん、了解。アルティメットスペル、クロノフリーズ！！」

叫んだ瞬間、帝たちは光に包まれた。

恐る恐る目を開ける。

純白。

そこは何もない真っ白な空間だった。

その白さのせいで、広さも高さもわからない。

「何にもないな…」

《これはそういうものだ》

《展開率100%。誤差、異常ともにありません》

宙に浮いていたドククスと元の本の姿に戻っていたルージュが言う。

ドククスが帝に振り向く。振り向くという表現はおかしいかもしれないが、それはどこか人間くさい動きだった。

《帝、お前は体力も運動神経も普通の子供より上だ。

よってお前に今必要なのは武器の使い方と戦闘経験になる。

武器の使い方は紅蓮の王の記憶で見せる。ルージュ》

《はい。紅蓮の王の記憶をマスターに転送します。準備はよろしい

ですか?》

「ちょ、ちょっと待《待ちません》確認する必要ねえだろ!」

ルージユから光が放たれ、帝に当たる。

帝は一度痙攣し、ゆっくりと倒れていった。

「っっっ」

頭を押さえて立ち上がる。

《わかったか?》

「わかったけどよ、痛いなんて聞いてないぞ……」

元気のない声で言う。

《では召喚を行いますよ》

「ちょっとは心配しろよ!」

《ルージユ剣を使う者で頼む》

《了解しました。…どうかしましたかマスター?》

見れば帝がうつぶせに倒れ、泣いている。

「もう知らん。勝手に進めろや……」

《わかりました。進めます。

使い魔検索……。該当。

マスター、召喚を》

帝はうつぶせのまま、

「召喚…、けだかきせんしバーサーカー……」

投げありに召喚を行った。

そして現れたのは巨大な門。

ゆっくりと開いていき、出てきたのは二本の長剣を持ち、ポロポ

ロの戦闘衣を着た一人の美女だった。

一番目を引いたのは剣ではなく、顔にある古い傷跡だった。だがそれは彼女を醜悪にさせるのではなく、彼女をより美しく見せていた。

「今の王はガキ何だな。すぐ死んでも知らんぞ？」

《死なせないために訓練をするのだ》

第一声はこちらに対する文句だった。

「お前もいるのかドュクス」

彼女がドュクスのほうを向く。

「…随分と小さくなったな機械人形」

《うるさいぞ。戦バカの怪力女》

彼がそう言った瞬間バーサーカーは剣を床に突き刺し、近づいてドュクスを床に叩きつける。

《ぐあ、貴様何をする！？》

「うるさい黙れ」

彼女は叩きつけたドュクスを踏みつけだんだん力を入れていく。

《まままま待て！！私が悪かっただからそれ以上踏むな！！壊れる

！！》

彼女は足をどけ、剣を抜き一度鼻を鳴らし、

「ま、私は戦場があればいい。

おい、ガキ。契約したいなら私に一撃入れてみせる」

肩をその手に持つ剣で叩きながらバーサーカーは言う。

「準備ぐらいは待ってやる。早くしろよ」

…何でこの人こんなに上から目線なんだ？あれか、私こんなに強いですよーってことですか？ほんとにバカなのかな？てっうお！？危な！？

首筋に剣が突き付けられていたので、後ろに飛び退く。

「何すんだよ！？待ってくれるんじゃないか！？」

「いや、何かむかついたからな」

それだけでこちらの命を奪おうとするのか！？

「よ、よおしやってやるうじゃねえか！！ドュクス！何か武器くれ

！！」

《任せろ！奴に目に物見せてやれ！》

変なところで結託した二人だった。

帝の体を光が包む。

それが収まると、帝の服装が変わっていた。

黒のレザーズボンと、白のレザーコート。

胸には軽鎧を着け、両腕には肘までの銀のガントレット。

そして右手には赤色の剣を持っていた。

「おお！すげー！！」

《王の装備していたものを出してみた》

《この時代に合わせているので安心してください》

「この剣とかすごいのか！？」

《いや…》

「え？」

ドユクスの一言で帝のテンションが一気に下がった。

「強い武器出してくれんじゃねえのかよ！！」

《仕方ないだろう！これ以外では魔剣や聖剣と呼ばれるものや、斧に槍、杖という使うのに癖があるものばかりなのだ！！魔剣や聖剣ではお前の精神が吞まれてしまう。》

《もっと精神と肉体を鍛えんねばならん》

「…準備できたな」

バーサーカーに声をかけられる。

「ちよ、待つ「もう待たん！！」ですよねー！！」

剣を肩に担ぎ、こちらに突っ込んでくる。

呼吸と共に振り下ろされる右の長剣。

それを何とか視認し、後ろに飛ぶ。

轟音と共に剣は床を砕いていた。

「何っー威力だよ…」

バーサーカーは剣を引き抜き、また突っ込んでくる。さながらそれは弾丸だった。

剣の有効範囲に帝を捕らえた瞬間急制動、右の足を軸にして遠心力を加えた左の一撃を叩きこむ。

「ちっ！！」

回避が間に合わないので剣で受ける。

「がっ!?!」

車にはねられるような衝撃を受け、横に吹っ飛ぶ。

床に叩きつけられる。一転、二転、三転と転がりやっと止まる。

「っ!」

あまりの衝撃で呼吸ができない。

「そんなものか?そのままでは死ぬぞ?」

近くで彼女の声が聞こえたので逃げようとするが体が震え、動くことができない。

「興ざめだな...」

蹴りが腹にぶち込まれる。

「ごっ!?!?がはっ、げはっ!?!」

血混じりの胃液が吐きだされたが、呼吸ができるようになった。

「おい、ドユクス。もう終わろうぜ?こいつじゃだめだ。この世界はあいつらのもんだよ」

…何だと?

「やっぱりガキにはまかせられねーな。今からでも新しい王を見つけた方がいいんじゃないかねえか?」

…このアマ人の気も知らんと...

「ごちゃごちゃうるせえよ...」

「あん?」

剣を杖にして立ち上がる。血の混じったつばを吐き、

「俺がごほっ、やるって引き受けたんだ。最後までやりとおさなきゃ男の子じゃないってね」

「そんな理由で命かけんのか?」

「そんなんでもこんなんでもねえよ。理由としてあるんだそれでいいだろうが?」

笑う。

「ダチがいる世界なんだ。泥かぶんのは俺だけでいいさ」

「ハンっ、ちゃんとした理由あるんじゃないかねえか」

バーサーカーがまた武器を構える。

「いいぜ、最後まで相手してやるよ。それで死んでも文句はないだろ?」

「文句はないがちょっと待ってくれ」

「何だ?」

「いや、ドクスとかに聞きたいことなんだけどな?」

《む、何だ?》

「俺ってホントに不死なのか? バーサーカー俺のこと殺す気満々だけど?」

傷は光と共に治癒していった。

沈黙。

《その、だな。前はああ言ったが、正確に言うとアルカナを身に宿した者。それと契約した者はお前の中にあるアルカナを見ることができる。それをとりだせばお前をだな、その……》

「その、なんだ?」

《バーサーカーは前の紅蓮の王の軍勢の一人です。契約は切れていないようなので、マスターを殺せるというわけですね》

「よっし、これ無事に終わったらドクスお前を壊す」

《待て! 何故私だけなのだ! ルージュはどうした!!》

「ルージュは女だから許す!」

《男女差別か!?!》

《私たち機械ですけどね。あとマスターは変なフラグを立てた気がします》

「…もういいよな?」

「わりい、もういいぞ」

帝も剣を構える。

「あんたを俺の軍勢の配下に加えてやるよ!」

「ふん、やれるものならやってみろ!!!」

そう言っただけバーサーカーは天を向いて吠える。

ウォークライだ。

帝の身をその叫びが震わせる。

彼女は両手に持つ剣を翼のように広げ、身を低く構える。そして、

「行くぞ!!」
走った。

さつきまでとはあきらかに違う速度でバーサーカーが迫る。

…受けたらマズい。さつきの二の舞になっちまう。つかあんなのもっかい受けたら死ぬるな。

ならば、

最初と同じで避けるしかない!!

一撃必殺の右の突きが来る。

それはなんとか、

「見えてる!!」

ギリギリで左にかわす。

避けられるのは予測していたのだろう。彼女は剣を横に倒し、そのまま追撃に来た。

バックステップで逃げる。髪が数本断たれ宙を舞う。

がら空きになった体に左の剣が振り下ろされる。

体を無理に動かし、バーサーカーの横を抜けた。

冷や汗が噴き出す。たった数秒なのにここまで死ぬかも知れないと思うことはないだろう。

「そら、どうした!? 私に一撃当てないと終わらんぞ!!」

床を断ち割りながら左の剣で斬り上げてくる。

後ろに全力で飛ぶことによって避けた。

「ふん、避けることには才能があるようだな?」

「そりゃ、はあ、どうも!!」

また上段からの振り下ろし。

…バーサーカーの得物はデカイ。なら…!

先ほど見せられた王の記憶を思い出す。

…ああ、

「最初からしとけばよかつたなあ…!」

剣に魔力を通し、斬撃を飛ばす。

反撃されるとは思ってなかつたのだろう、彼女はとっさに両の剣で帝の攻撃を防いだ。

それは、

「チャンスつてやつだ…!」

前に飛び出し、剣を振る。

それは吸い込まれるように彼女の胸にはいった。

「か、勝った…」

疲れて足が震え、倒れる。

「やるじゃないか、ガキ」

腹を押さえたバーサーカーが近づいてくる。

「とっさに剣の面の部分で攻撃するとは、何だ？情けか？」

どこか皮肉を込めた言い方だった。

「違う。あんたみたいな戦闘狂でも女だからな。怪我させるのは悪いと思っただ」

その答えを聞き彼女は一瞬きよんとし、すぐ後に爆笑した。

「はははは、女、女か」

笑われたことに少しむっとしながらも問う。

「何がおかしいんだよ!？」

「いやなに、前の王もそんなことを言っただろ？お前と同じように私を斬らなかつただよ」

よほどおかしかつたのだろう目には涙がたまっていた。

「ふふふ。いいだろう、ガキ契約してやるよ」

「ガキじゃない！俺の名前は帝だ！！」

力強く言う。

するとバーサーカーは剣を床に突き刺し、帝に向かって膝をつき頭を下げる。

「ならば帝よ、我バーサーカーはこの剣にかけてお前を守護する」とをここに誓おう！！」

第八話　く訓練く後編2（後書き）

はい、いつものように読んでくれた人に語りつくせないほどの感謝を。

というか作者は毎回ちゃんと感謝してるのかどうか怪しいです。だって記憶が曖昧だから（笑）。更新遅れてマジすいませんでした。特に理由はないんです。ただ作者が話を書かなかっただけ。次の話はなるべく早く作ろうと思います。あと、感想いただきました。この場を借りて感謝を。励みになりました。何か要望等がありましたらどしどし送ってくれてかまいません。では、また次回の時まで。

P?1万突破記念座談会（前書き）

続きを期待していてくれた人すみません！！今回はぐだぐだの上につまらないです。いつの間にかこんなことになっていたので急遽書いてみました。
ではござ。

P?1万突破記念座談会

作者 「PV1万記念座談会を行います！」（以下作）

帝 「こんな駄文を読んでいただきありがとうございます！主人公の帝です」

バーサーカー 「無駄に長いものな、この小説」（以下バ）

なのは 「ヒロインなのに出番が少ないです。そろそろ作者さんとお話しないといけない気がします」

（以下な）

作 「ビクッ！いい、嫌だな出番作つてあるに決まってるじゃないっすか！」

バ 「私の出番もあるだろうな？」作者の首に剣を突き付ける。

作 「あ、あります！だから剣下げて！俺死んだら続き書けないよ！？」帝をちらと見るバーサーカー

帝 「バーサーカー、剣を下げる」

バ 「ちっ！」

作 「よ、よかった。って首少し切れてるー！？」

帝 「話進まんから無視するぞー。まあいつのまにかP?が1万

超えてたわけだが…」

作 「俺の実力だな！」

な 「ほざいてるなの。りりなの人気のおかげだよ。つまり私のおかげなの！」

作 「くっ、ほんとのことだから言い返せない…」

帝 「何だ自分でも気が付いてるのか？」

作 「当たり前だ！俺の文才でいきなり人気が出るわけねえよ。正直なんのクロスもしてない小説書いたとしても読んでくれる人がいるとは思えないしな」

バ 「だからりりなのとL.O.?をクロスさせたのか？」

作 「そ。最初は違っただけだね？」

な 「どういうこと？」

帝 「最初は召喚獣も三体だけで、ヒロインも一人だったんだ」

な 「もちろん私だよな？」

作 「ビクッ」

な 「作者さん？」顔を作者に近づけるのは。顔をそむける作者。

バ 「ん？なにに“ヒロインはフェイトよ！”だそうだ」アシスタントに渡されたカンペを読むバーサーカー

な 「作者さん、お話しよっか？」

作 「あ、ちよつまっ！アシスタントー！！」引きずられていく作者。

なのはと作者がログアウトしました。

アシスタント1 「ふっ、悪は滅びたわ」

アシスタント2 「ちよつとやりすぎ…でもないよね？」

帝 「何してんだ？アリサ、すずか？」アシスタントと書かれた帽子をとるアシスタント1、2改めアリサ、すずか。（以下ア、す）アリサとすずかがログインしました。

ア 「いきなり人の家に来てこんなことを手伝わされたのよ」

す 「私も同じだよ」

バ 「話がそれそうなので元に戻すぞ？もともと考えていたのは原作に従い、チートなし、フラグ乱立もなく、フェイト一筋の設定だったらしい」

ア 「ふーん、つまり帝はフラグ乱立だと…」

す 「…後で帝君お話ね？」

帝 「何故俺に飛び火した!？」

な 「ふー、すっきりしたの」作者を引きずり、顔に血を着けた
なのはが来た。なのはと作者だったものがログインしました。

作 「まだ生きてるぞー！」

皆 「」「」「うるさい、黙れ(なの)

(りなさい)

(るうか?)」「」「」

作 「くすん…」

帝 「書くのが遅い理由を聞こうか？」

作 「あーその…」

バ 「早く言え」剣を構える

作 「他の作者さんの作品を見ました!！」

ア 「ぶんなぐるわよ？」作者を殴りながら言うアリサ。

作 「ぐっごは!もう殴ってる!！」

す 「アリサちゃんそれくらいにしとこっつ？」

ア 「なんで止めんのよ!！」

す 「やるのは今から言うこと聞いてからでも遅くないからだよ」

な 「?すずかちゃんなにを知ってるの?」

す 「うん。作者さん、新しい作品書こうとしてるんだってね?」

作 「な、何故それを!？」

帝 「本当なんだな?」ドュクスとルージユを傍らに浮かべながら作者に近づく。

作 「はっ!！」

バ 「殺すか…」長剣を肩に担ぐ。

な 「作者さん頭冷やそっか?」どこからともなくレイハを取りだし、起動させる。

ア 「塵も残らないと思いなさい」ガトリングガンを構えるアリス。

す 「ごめんね作者さん」手甲の指から赤く長い爪を伸ばす、すずか。

作 「ま、待て落ち着け!なのはアリスすずか!まだ出してない装備出しちゃ駄目ー!！」

帝 「ドュクス、エクスカリバーセットアップ。ルージユ、スキルロード。ベヒーモス!」

作 「帝お前もまだ出してないの使っな!！」

皆 「問答無用！」

作 「じつぢやー！ー！ー！」

P?1万突破記念座談会（後書き）

読んでくれてありがとうございます。次の話は鋭意作成中です！後新しいのを作るかもいつてますが結構本気で考えてます。ネギまと終わりのクロニクルのクロスです。今おわクロを読み返しています。でも今はこちらを優先して書いています。しかし、おわクロはおもしろいですね。読むのつらいですが……。同士はいないかっ！とりみだしました、すいません。続きは今週中には出したいですね。頑張って書こうと思いますので待っていてください。

第九話 〽事件の始まり〽（前書き）

お待たせしました。久しぶりの投稿です。え？待たせすぎ？そんなことは…ありますね。まじでごめんなさい。原作を見ながら話を作ってたんですが、なかなかうまくいきませんで。他にも理由があるんですがそれは後書きで。

ではどーぞー。

第九話　～事件の始まり～

バーサーカーと契約した次の日、学校ですずかに会ったがいつもどおりであった。

ただ前よりも帝を気にかけるような行動をとるようになった。

そのことではとアリサに妙に勘ぐられ、問い詰められたがなんとか切り抜けた帝であった。

家に帰った後、その状況をドククスとルージュに語った帝はこんなことを言った。

「あの時の二人の背後には鬼が見えた」と。

森。

本来なら生き物たちがいて音が満ちているはずのそれは、死んだように静まり返っていた。

血を流している少年がいた。彼は息を殺し、周りの気配を探る。

何かが近づいてくる。

「っ！」

右手に持つ宝石を掲げる。

すると翠色の円の中に二つの四角形、さらにその中に円が描かれた魔法陣が展開された。

魔力が集束されていく。

身の危険を感じたのだろう。何かは速度を上げ彼に迫る。

「…光となれ。許されざるものを封印を輪に！」

何かが飛びかかって来る。

「ジュエルシード、封印！」

魔法陣にぶつかり何かはふきとんでいく。

ばらばらになりながらもそれはまだ生きていた。

傷ついた体を引きずり、森の奥に逃げていく。

「逃がし…ちゃった。追っかけ…なく…ちゃ…」

魔力を使い過ぎ、疲労、怪我で少年だ倒れる。

「誰か…。僕の声聞いて。力を貸して！魔法の…力を！！」

最後の力で言葉を紡いだのだろう。彼は意識を失った。

目覚まし時計が鳴る。鳴った瞬間に止めベッドに身を起こす。

「…何だ？あれは？」

寝ぐせまみれの頭をかく。

《マスター、昨夜に魔力反応が検知されました》

机に置いていたルージュが光る。

「ほんとか？」

《ああ。だが奴らではない。アルカナの反応はなかった》

「そうか。…位置はわかるか？」

《申し訳ありません。反応は微弱でしたし、短時間だったので正確

な位置までは…》

「だいたいならわかるんだな？」

目を向ける。

《はい。…かわるのですか？」

ベッドの端に座り、拳を握る。

「助けを求めてたしな。それにもしかしたら奴らが関わってくるか

もしれんしな」

《その可能性は高いな》

「反対か？」

《いや。我らは王の意思を尊重する。まあ、間違っていると思った

ら注意するがな》

その言葉に帝は笑みを浮かべる。

「…さて、用意して学校に行かなきゃな！」

「おーすっ」

学校行きのバスに乗ると、後ろの席に見知った者たちがいたので挨拶しながら近づいていく。

「あっ、おはよーみーくん」

「おはよう、帝君」

「おはよっ。ってあんた挨拶ぐらいちゃんとしなさいよ!」

なのは、すずか、アリサ。三者三様の挨拶が返ってくる。

「いーじゃん、アリサ。友達じゃんか」

「親しき仲にも礼儀あり、よ」

「はいはい、さすがお嬢様」

「何か文句あるの!？」

「あ、アリサちゃん落ち着いて」

「文句なんてありませんよー、アリサお嬢様」

「帝君もからかわない」

「アンタほんとむかつくわね!」

「それはどうも。アリサをからかうのはおもしろいからな」

「帝ー!!!」

いつもどおり四人で騒ぎながら、バスは学校に向かって行く。

昼休み。

「将来かー」

なのはがたこの形に切ったウインナーを口に入れる。

「アリサちゃんとすずかちゃんは今もう結構決まってるんだよね?」

「あれ?俺は?俺には聞かないの?」

無視。

「うちはお父さんもお母さんも会社経営だし、いっぱい勉強してちゃんと後を継がなきゃ。」

「くらいけど」

「おーい」

「私は機械系が好きだから。工学系で専門職がいいなって思ってるけど」

「ぐすつ。さびしくないからなー」

「そっか。二人ともすごいよねー」

「でもなのは喫茶翠屋の二代目じゃないの？」

「んー。それも将来のヴィジョンの一つではあるんだけど、やりたいたことが何かあるような気もするんだけど。まだ、それが何なのかはつきりしないんだ。私特技も取り柄も特にななし」

「ばかちゃん！！」

「っ！？」

アリサがなのはにレモンを投げた。

「自分からそういうこと言うんじゃないの！！」

「そうだよ。なのはちゃんにしかできないこと、きつとあるよ」

「だいたいあんた理数の成績はこのアタシよりいいじゃないの！それで取り柄がないとは、どの口で言うわけ！？ああ〜ん？」

なのはの上のり口を引っ張る。

「だってなのは文系苦手だし、体育も苦手だし〜」

「二人とも駄目だよ！ねえ、ねえってばあ！」

そ、そうだ帝君二人を止め、て？」

喧嘩…というよりはじゃれあいだろう。それを止めて欲しくて、帝に助けを求めたがその帝が見当たらない。

「あ、あれ？帝君？」

「日神ならあそこにいるぞ」

なのはとアリサの騒動を見ていた他の生徒が教えてくれた。

その方向を見ると帝が屋上の隅でうずくまっていた。

「あはは、ちょっとやりすぎちゃったかな？」

朝、アリサをからかったので逆に今度はみんなで帝をからかったのだから効いたようだ。

彼の周りだけ空気が重かった。

「ふ、二人ともそんなことしてる場合じゃないよ！帝君の機嫌を直さなきゃ！」

その後三人で機嫌をとり、帝が元に戻ったのは昼休みが終わるころだった。

「まったくちよつと無視しただけであんなに落ち込まないでよね」

「お前三十分以上無視されてみる。かなりつらいぞ」

「もともとはみーくんが悪いんだよ」

「三人とも落ち着いて」

帰り道を四人で歩く。

「ふん。まあいいわ。それよりこっちよ。ここを通ると塾に行くのに近道なんだ」

「そうなの？」

「ちよつと道悪いけどね」

「…俺もついてかなきゃならんのか？」

両腕になのはとすずかがくっつき、アリサが帝の背を押している。

「何よ？なんか文句あるの？」

「みんなで行こうよ帝君」

「仲間はずれはよくないの」

「ちっ、わかったよ」

昨日感じた魔力反応のことについて調べようとしていたが諦める。

「あ」

固まって歩いていたらなのはが突然立ち止った。

「?どうしたの?」

「なのは?」

「ううん、なんでもない。ごめんごめん」

「大丈夫?」

「うん」

「じゃあ行こう」

「まさかね…」

なのはの動きを見て帝は思う。まさか昨日の夢をなのはも見たのではないかと。

そんなことはないだろう。なのはから魔力を感じたことはなかった。俺の勘違いだろう。そう思い、頭を振って今の思考をなかったことにした。

「助けて…」

声が聞こえた。

なのはと帝が立ち止る。

「なのは?」

「帝君?」

「…今、何か聞こえなかった?」

…なのはも聞こえたってことはやっぱり…。

「何か?」

「何か声みたいな」

「別に…」

「聞こえなかったかな?」

三人があたりを見回す中、帝は思考する。

なのはに魔力は感じられなかった。だが今のに反応するということは魔力が高いということになる。

何故気付かなかった?彼女の中に力が眠っていたからか?それよりも今は…。

「助けて…」

「…っ!?!?」

「「なのは(ちゃん)、帝(君)？」」

二人は走り出す。

「多分こっちの方から」

「先に行くぞなのは！」

帝はスピードを上げた。

「こいつは…」

少しすると地面に一匹の動物が倒れていた。

「は、早いよみーくん…」

なのはもスピードを上げたのだろう、息も絶え絶えだった。

「どうしたのよなのは、帝。急に走り出して？」

「あつ見て。動物、怪我してるみたい」

二人も追い付いてきたようだ。

「あ、うん。ど、どうしよう？」

「ど、どうしようって、とりあえず病院！？」

「獣医さんだよ」

「えっと、この近くに獣医さんてあったっけ？」

「ああ、えとこのあたりだと確か…」

「待って、家に電話してみる！」

動物を抱き上げたなのはを中心に、彼女たちは慌てていた。

動物がなのはを見上げているのを帝は少し離れたところから見つめる。

…やはりこいつは…。

「怪我はそんなに深くないけど、随分衰弱してるみたいね。

きつとずっと一人ぼっちだったんじゃないかなあ？」

治療を終えて獣医の女性が手を拭きながら四人に話す。

「先生、ありがとうございます！」

「「「ありがとうございます！」「」「」

「いいええ、どういたしまして」

動物を二人が囲んで眺める。帝は腕を組み、目を閉じ壁にもたれていた。

「先生、これってフェレットですよね？」

「どこかのペットなんでしょうか？」

「フェレット…なのかな？変わった種類だけど。」

それにこの首輪についてるのは…、宝石なのかな？」

そう言っ先生が首輪に触れようとした時、フェレットが目を開きました。

「「ああ」「

起きた」

フェレットはあたりを見回し、なのはに視線を向ける。

「うっ？」

「なのは、見られてる」

「え、あ、うん。えっと、えっと」

そろそろ手を伸ばすとフェレットはおいをかいだ後、なのはの指をなめた。

「はあ」

だが、フェレットはすぐに倒れてしまった。

「しばらくは安静にしたほうがよさそうだから、とりあえず明日まで預かっておこうか？」

「「「はい、お願いします」「

「良かったらまた明日様子を見に来てくれるかなあ？」

「「「わかりました」「

「…お前ら塾は大丈夫なのか？」

帝の言葉に三人の動きが止まる。

「ほんとだこのままだとギリギリだよ！？」

「あっ！やば！なんでもっと早く言わなかったのよ！？」

「…フェレットの可愛さにメロメロになったのどこのどいつらだ」

「うう、それを言われると…。あっ、先生すいません、また明日来

まーす」

そして三人は塾へ、帝は家へと向かった。

《帝…。どうだった？助けを求めていた者に接触できたのだろうか？》

「会ったが、何故助けを求めているのかの理由は聞けてない。

衰弱しててな、それはまた今度になるだろ」

家の自室でドュクス達と話す。

《マスターその者はいつ回復するのでしょうか？》

「専門家じゃないからわからねーよ」

ため息と共にベッドに倒れ込む。

ベッドの上に置いておいた携帯がメールの着信を知らせた。

「ん？誰からだ？」

見るとなのはからで、あのフェレットを彼女の家で預かれることを知らせるメールだった。

「ちよつと、まずいかな…」

《何か問題が発生したのですか？》

机に置いたルージユが光る。

「ん。なのはがああの念話を聞いてたつてのはさつき話しただろ？

その念話を発信してたあのフェレットを家で預かるつてよ」

《こちら側にかかわるかもしれないな》

「ああ。ま、そんなときは俺が全力でなのはを守るだけだ」

そう言つて拳を握る。

《っ！？魔力反応を感知、ここから近い。

帝よ、どうする？》

「なのはが行つてるかもしれんしなー。行くしかないか。

ほいじや準備しますかね？ドュクス、ルージユ。セットアップ」

《《了解》》

帝が窓を開け、身を乗り出すと光が包み、光が収まると帝の姿が

変わっていた。

漆黒の鎧に黒のマント、そして頭部を覆い隠す黒の仮面。

《今回はこの姿の方が向いているだろう》

《ドユクスの本래の姿ですね》

家の庭に着地し、目的地に向かいながら疑問を告げる。

「ドユクスって人間だったのか？」

《種族としては機甲になるが特殊なものだ。最初に言ったと思うのだが、私は自分の意思でこの姿になることを選んだのだ。新たな王を導くために。

そんなことより急げよ、帝！》

「わかつてるよっ！！」

夜よりなお深い漆黒が空を駆ける。

「ちっ、遅かったか！」

夜空を光が貫く。

光が収まるとそこには学校の制服に似た服を着たのがいた。

「成功だ！」

見れば彼女の足もとには例のフェレットがいた。

「あいつちゃんと説明しやがったんだろうな！」

《いや、彼女の様子からするとされていないだろうな》

「ですよねえー！！」

あとであのフェレットにはお仕置きだ！そう思いながらなのはに近づく。

『その君！』

「え？だ、誰ですか！？」

帝の方を振り向いたなのは動きを止めた。

それはそうだろう。夜中に見も知らぬ他人から声をかけられ、しかもその声をかけた相手の顔が見えないのだ。怯えて当然だろう。

(なのはには気づかれてないよな)

《ああ、大丈夫だ。後はお前がぼろを出さなければいい。こちら側に巻き込みたくないのならな》

(もう関わってるだろ?)

《そうではなくて、神々との戦いにですよ》

(なるほどね)

「あ、あの……」

少しドククスたちと念話で話していたのでなのはのことを失念していた。

『失礼、考えごとをね。ところで何故君のような少女がこんなことを?』

「そ、それは……」

なのはが答えようとした瞬間、こちらの様子をうかがっていたのだろう黒い獣が飛びかかってきた。

「っ！危ない」

『…召喚、気高き戦士バーサーカー!!』

獣と帝の間に突然巨大な扉が出現し、その中からバーサーカーが飛び出し、獣を斬り飛ばす。

「おいおい、こんな雑魚相手に私を呼び出す必要があったのか?み…、おい何故機械人形がここにいる?」

『話せば長くなるが今は突っ込まないでほしい。それより今はあれを何とかしよう』

第九話 〽事件の始まり〽 (後書き)

いやーこんなに遅れちゃってすいませんでした。理由としては車校終わらせたり、ブレイブルーやったり、学校の宿題やったり、テストやったり、ブレイブルーやったり、ブレイブルーやったり、あれ？ブレイブルーの割合のほうが多い！？

すいません！だっておもしろいんですもん！ハクメンかつこいいんですもん！！

理由としては最悪ですね。今後はこんなことないようにしたいです。

今日中にはもう一話投稿するつもりですので、読んでくれている方はお楽しみを！これは絶対なので安心してくださいね？

では、また今日中に〽。

番外編 〓 家族〓 (前書き)

はい！本日二回目の投稿です！！大学でネタ考えてましたからねw
続きを期待していた人からしたら番外編かよ！？ってなるかもです
ね？

お話の続きは頑張っつて作るので待っつててくださいね？

では、番外編どーぞー。

番外編 〱 家族

これは帝のことがいろいろとばれた後の話である。

学校が終わり、塾に行くのは達と別れ家への帰り道を一人歩く。その間もドクスタたちと念話で戦いについて話したりしていた。しばらくして見えてきたのは、両親が経営しているレストラン、トワイライト。

営業日のはずなのに何故か明りは点いておらず、臨時休業と入口に看板がかかっていた。

首を傾げながらそのすぐ隣、かなりの大きさを持つ洋風の自宅に向かい門をくぐる。

「ただいまー」

「帝ー!!」

「うお!？」

鍵を開け、家に入った瞬間烈火が帝の名前を叫びながら突っ込んできた。

だが、バーサーカーやクリスの訓練を受けている帝は、そこいらにいる小学生と運動神経の次元が違う。驚きながらも軽いステップで右に避ける。だが相手が悪かった。

「甘いわ!!」

「何!？」

烈火は右足で床を強く蹴り、帝が避けた方向、彼から見て左に向きを修正。続く左足で床をもう一度強く蹴りさらなる加速を得て帝に激突する。

「っげへ!!」

帝は普段上げたことのないような声を出しながら吹き飛び、烈火

にマウントポジションを取られた。

「ははは、まだまだだな帝！ってこんなことをしてる場合じゃない！起きろ帝！！」

帝の上で勝利宣言を上げていた烈火は何かを思い出し、帝の制服の襟首をつかみ揺する。それはもう高速で。鈍い音が何度も響いていたが気付かない。

「起きろ！大事な話なんだぞ！？それとも何か？俺の話は聞けねえつてのか！？何か反応したらどうっが！？」

いきなり烈火が吹き飛ぶ。

「烈、何してんの？殴るわよ？」

「殴ってねえし蹴ってるよ！しかも注意する前に！！」

蹴り飛ばされた烈火が頭を押さえて抗議してくるが無視。

「帝は気絶してんの。烈が無茶するからよ？」

「クリスの訓練の方が無茶だろ…」

空気を裂く音と破砕音が響く。烈火の顔のすぐ横にクリスの拳があり、壁を砕いていた。

とてもいい笑顔を浮かべ、

「…何か言った？」

「いいいいエ、ナニモイツテイマセン！」

「よろしい」

壁から拳を抜き笑顔を浮かべたまま言う。

「壁の修理費は烈のお小遣いからだすからね」

「な！？壊したのはクリスだろ！？」

そう言った瞬間に烈火の顔の前には拳があった。

「何か問題でも？」

「ないです…」

「うん」と一つ頷き、手を下す。

そしてクリスは息を吐き、気絶している帝を一瞥し、

「帝！アンタもいつまで気絶してんの！！」

「…はあ…」

無慈悲にその腹に足が振り下ろされた。

普通はここまでしないだろうが、この家庭では日常になっていた。

「げほ、ごほ！こ、この起こし方はどうかと思うんだけど母さん…」

「うるさいわよ。でもこれでも起きるもんなのね」

「確認なしでやったのかよ！！」

父と子がハモる。さすがの烈火でも今のはないと思ったのだろう。

「Shut up! ほら大事な話があるんだからリビング行くわよ

! hurry, hurry!」

三人しかいないが家の中での地位一位のクリスの言葉で一行は動き出す。

ちなみに最下位は烈火である。

テーブルの上でいれたたての紅茶が湯気を上げる。

「んで？大事な話って何？」

「うむ、帝よく聞けよ？父さんな母さんとイチャイチャするのがんつが！？」

「息子に何言おうとしてんのよ！！」

クリスが顔を真っ赤にし蹴りを放つ。烈火は椅子を巻き込みながら吹き飛んでいく。

「ごほん。帝、喜びなさい。アンタに妹か弟ができるわよ」

「…マジか？」

「大マジよ」

「帝！俺に感づくお！？」

「黙ってなさい」

飛び起きた烈火が踏みつぶされる。

「わかったのは今日なんだけどね？病院行って調べてみたの」

「…レストランどうすんの？」

「私はしばらく休みになるわね。だ・か・ら、帝頑張ってるね！」

「イヤ無理だろ！学校どうすんだよ！？」

「…休学とか？」

「本気で言ってる？」

「んー、わりと本気だったりして」

「ぜんぜん悪びれもせずと言うクリスに対して頭を抱える帝だった。

「まーそんな冗談は置いておいてだ」

烈火が立ち上がる。クリスの攻撃をいつも喰らっているのに無傷だった。一体どんな体の構造をしているのだろうと不思議に思う。

「帝、誰かバイトで入れそうな奴知らんか？なのはちゃんたちかどうかだ？ん？」

「あいつらも学校があるし、なのはは翠屋の手伝いだろっが。それにアリサとすずかは塾とかで無理」

「だよなー。今から募集しても日が掛かるしな。どうすっか？」

椅子を元に戻して座り、机にだれる。

《人手があればいいのか？》

「ドユクス？」

指輪としてつけていたドユクスに目を向け、机に置く。

「お？なんだ？何かあんのか？」

《うむ。守護者システムを使えばいいのだ》

「…守護者システム？」

帝たちの声が重なる。

《マスターの魔力を使い、使い魔を人間の形で現界させるのです》

帝の服のポケットからルージユが出てきて宙に浮く。

「何で最初から使わなかったんだ？」

《使い魔の意思を聞かねばならないからだ》

ドユクスは一つのモニタを映す。

それにはデフォルメされた帝が映っていた。

《契約した使い魔は帝がゲートを開くことで呼び出せる》

モニタの中の帝が手を上げるとその後ろに門が現れ、一体の魔物が出てきた。

《召喚は呼び出す者を選び、この世界と使い魔がいる世界とを結ぶ門を作り、そして呼び出す、という工程が必要だ。これは門を作るから余計に魔力を消費するのだ》

《意思をきかねばならないと言った理由は、彼らが人間として生活したいかどうか…なのです》

呼び出された魔物にデフォルメ帝が何か話している。

魔物は首を横に振り、帰って行った。

《人間という形に収まりたくない使い魔もいるだろうからな》

「なるほどね。で？守護者システムの利点は？」

《門を使わないので魔力消費が少なくてすむ。魔力ラインがつながるがそれほど魔力は奪われない。》

身近な警護としても置いておける。緊急時は自動で帝の近くに召喚可能だ》

「なかなか便利だな」

烈火が頷く。

「何故に父さんが答える？」

「いーじゃんかよ！俺はしゃべりたいのわかる！？後重い空気嫌いなんだよ！シリアス長えよ、ギャグ入ろうぜギャグ！！」

「よし。なんか面白いこと言ってみなさい？」

「え？えーとだな。そのなんだ…」

「うん。何？」

「…俺が全裸になったら面白いかな…？」

数秒の沈黙の後、烈火の顔面にクリスの拳が叩きこまれ壁にぶち当たる。

「続けていいわよ」

《あ、ああ。それで帝には誰がいいか決めてもらいたいのだ》

「うーん誰がいいかな…？」

《…烈火殿はほうつておいていいのか？》

「いーのよ心配しなくても。いつのまにか復活してるだろうし」

「ははは！クリスの愛情表現は過激だな！」

「ほらね」

《う、うむ》

壁にひびが入るほどのパンチをくらってびんびんしているのは人間として正常なのだろうか？

「決めた。バーサーカーはどうだろうか？」

そんな会話の間に帝は決めていた。

今の騒動を気にしない所を見ると毎日こんなことをしているのだろうか。

《彼女でよろしいのですか》

「ああ。母さんとしての訓練はやれなくなるだろうか。バーサーカーだったらあの空間の中でいつも相手してもらってたから、呼んだらこっちの世界でも訓練してくれそうじゃん？」

《ふむ、確かにな》

「なんだ？相手って言い方なんかエロく聞こえつぐおー！」

家が少し揺れた。

「気にしなくていいわよ？」

「…もう呼ぼうか」

《…そうだな》 《そうですね》

帝は勢いよく立ちあがり、頬を叩く。

「よし、やるか！ルージュー！」

《了解。召喚システムを起動します》

「…我と契約せし使い魔よ。今ここに姿を現せ！来い！気高き戦士バーサーカーー！！」

リビングに光が満ちる。

光はすぐに収まり、バーサーカーがいた。

「今回は訓練か戦闘ってわけじゃなさそうだな」
部屋を見渡し呟く。

《そうだな。守護者システムについての知識は大丈夫か？》

「あ？ああ、あれか。ふん。二度目の生にはあんまり興味はないんだが…」

帝を見る。

「？」

「…まあいい。守護者なってやるよ。ただ条件がある」

「な、何だ？どんな条件だ？」

少し腰を引きながら帝は問う。

「んなビビるこたねえよ。あと二人ほどついでに守護者にしてやって欲しくてな」

「なんだそんなことか。って大丈夫なのか？」

《人数制限というのはないな。だが三人となると、全員ここに住めるのか？》

「まっかせなさい！！」

さっきまで倒れていた烈火が飛び起きる。

「居候なんて余裕余裕！帝が生まれる前にしてた仕事の金が余ってるし、トワイライトでの収入もあるしな！だいいち、美人が住んでくれるのだ断るわけないだろう！？」

「父さん本音が出てる」

「はっ！」

烈火の後ろに鬼がいた。

「烈？」

「八八八はい！」

「ちよつと、お話しよっか」

鬼に引きずられリビングから出て行った。

「…で？誰を呼べばいいんだ？」

「いいの、あれ？」

ドアの向こうから肉を打つ音と悲鳴がかすかに聞こえる。

「気にするないつものことだ」

「あれがいつもなのか…？」

「ああ。慣れるしかない」

そういう帝の顔はどこか哀愁が漂っていた。

「そうか…。こほん。それでだが、呼んで欲しい奴はスピカとアサ

シンだ」

「？何でその二人なんだ？」

「ま、いろいろあるんだよ。ほらさっさと呼べ」

「わかったよ。ルージユ？」

《はい、いつでもいけます》

「うし。ほんじゃやりますかね。」

我と契約せし使い魔よ。今ここに姿を現せ！来い！！機械仕掛けの戦乙女スピカ！闇切りはらう闇の使徒アサシン！」

またリビングを光が包む。

しだいに光は弱まり、そこには二人の女性がいた。

薄桃色の長髪を腰まで伸ばし、体にピッタリとフィットする鎧をまとい、双刃の大剣をもった女性。しかし彼女は人間ではなく機械だった。その表情には人間が持つ感情の色も暖かさもなかった。

もう一人は黒の長髪を膝裏まで伸ばしポニーテールにし、黒の太ももまでの長さしかない戦闘衣を着て、二本の片刃の剣を持った女性だった。

「何かご用でしょうか？」

「戦闘というわけではないと判断する」

「アサシン、スピカ説明するから聞いてくれ」

二人に説明するのに数分かかった。

「で、どうかな？守護者になつてくれるかな？」

「私は殺すことしか知りませんが、いいのでしょうか？」

アサシンが不安そうに聞いてきた。

「知らないなら知っていけばいいさ。それにやりたいこととかも見つけていけばいい」

「…わかりました。守護者になります。その代わりにこの庭で花を育てていいでしょうか？」

それが私の守護者になる条件です」

「そんなことでいいのか？なら大丈夫だな。じゃ、アサシンこれからよろしくな？」

「はい！」

可愛い笑顔に帝は一瞬見とれてしまったが、慌てて頭を振りスピカの方に顔を向けた。

彼女の後ろでバーサーカーがおもしろいものを見るような顔でニヤニヤしていたが無視。

「で、スピカはどうかな？」

「…理解不能だと判断する」

「へ？」

「スピカは機械だ人間になってしまつと機械としての判断ができなくなるはずだ。」

何故スピカを人間にしようとする？

我々機甲は機械であるから命令に完璧に従う。

人間になれば反抗する可能性もある。何故だ？」

その問いに答えが返せないでいると、バーサーカーが答えた。

「お前は何故機甲があの世界にいたのか王に聞こうとしていたよな？」

「そつだ」

「答えは聞けたか？」

「いや、尋ねる前に王がいなくなった」

「そつだつたな。なら今回はお前自身で答えを見つけていいチャンスだと思つぜ？機甲でできなかつた考えを人間になってやってみる。考えるくらいなら一緒にしてやれるしな。ああだが、もしわからんまま死にそうになるんなら帝に聞け。こいつが今の王だしな」

「ちょ、最後俺に丸投げつてどうよ？」

「黙れ王様。王になつたんだからそれくらい答えられるようになつとけ」

「ちつ、わかつたよ。スピカがその答えを出せないときは俺が答える。それでいいな？」

「ああ、いいぞ」

「…スピカを抜きにして話が進んでいるが、確かにそれでいいと判

断する。ではスピカが守護者になる条件はあの世界での機甲の存在意義について答える。王よ、正しい解答を求めろぞ？」

「ああ、わかったよ」

帝は一つ息をこぼし、立ち上がり思う。これからはにぎやかになっ
つていきそうだと。

そして新たに家族となる三人を視界に納めて言った。

「これからもよろしくな！」

番外編 〽家族〽 (後書き)

はい、キャラが増えて大変な作者ですwこれからも増やしますがね？

とりあえず次のお話は土、日中には投稿したいのですが、課題やバイトで時間が作れないかもです。気長に待っていただけると嬉しいです。

今回ほど長く間隔は空けないつもりなのでどうか見捨てないてくださいー！！

ではまた次の話でー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1942/>

魔法少女リリカルなのは～紅蓮の王～

2011年7月7日20時48分発行